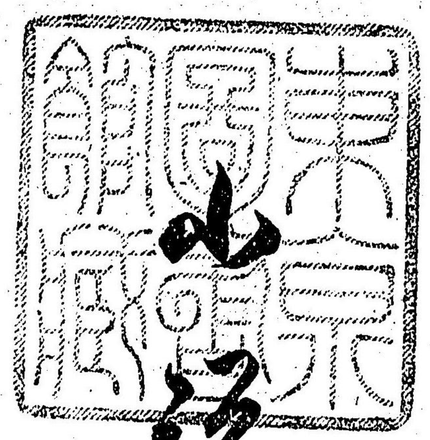
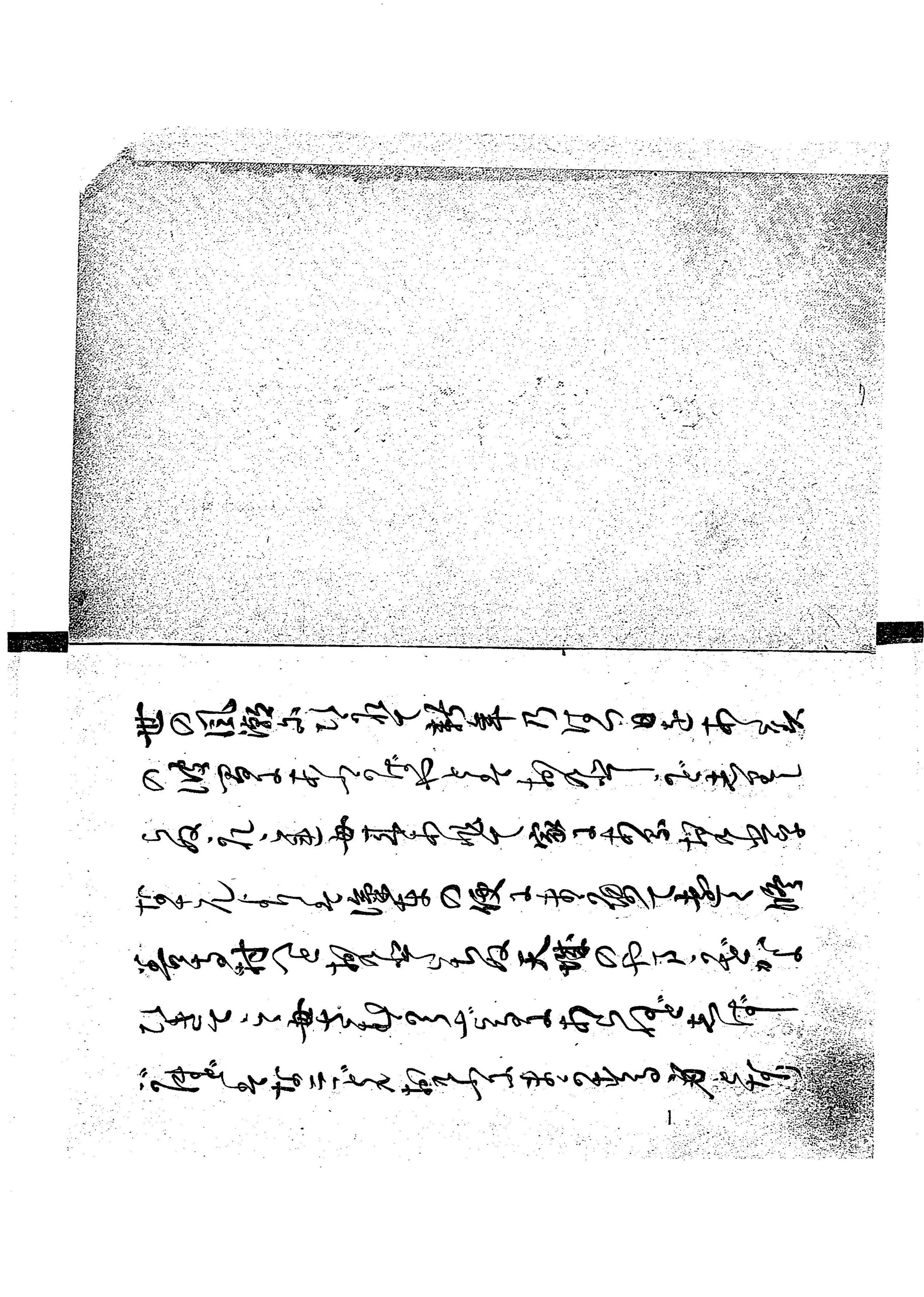
24-6
ヨ7A20
Ve3013/23



九史稿

完



さればこゝろそ甚まていとのどかなるまゝ
にもそことりく行李のうちはなるこしや笠
残菊やこの花のさかゑん大つるよしめくして
ふ里つるかい山里にこそそなかつくに讃帯
笠の緒子ばどのゑばしるもあらそそのなれと
家刀自をとゝめじてうすふはど屋ぞの障子
をひきあわせて入るゝそのありとられねど必ず

うちは色くろき顔つきして手織の衣きたる
はしはずれ其けき田舎人あるのさていやうそ
つぐなれどぬしも旅人まてことにもろく菓むかう
にあはせ屋くあれはかれ学こゝひけぬかせむ
よそ推察しつるなりあのれそこの王り若失
なさきつゝ鋤鍬かつことえせず明あるおもみを
さればことわり孔筆子をそのことく京傳る

琴の演奏のごとき要とある文脈の力つるもて
これをこゝに学ぶるばかり所ゐ正よしろをやうく
画家絵ふるものゝ作りまさつぼりて以下の
まやびをもうづばんとまどるまきを以ゝ
たゝものゝとばハ解しづたゞゆゝく
はあまどさて おきぬさてこゝろをなべ
て小説の世界となりて著のこゝは都まさぐ巻

はは限界ありてとまづこゝ重出つるをもとるに
文のつゞくもとのりの世づをいとかはり
てあれど人情のせゝ形をこゝ出をいへ
以下のゝもあゝ巻ば延宝元禄より
好なる先聖の趣向をあねゝまれるを書く
寛弘の才女のあとをこゝねてほのあるん見
ゆゝりさばまづ日づ玉の小説の世ゝ

りて大のことをぞ考へんとおもふ事よきか
ゝるべし人はまことおろかなるぞ世間を捨ずこゝろ
ゝのまゝといふまゝの行ひ入てゐんゆまでを
をもおれとおもふやまひある人なりそのやう
ひとを療ぜんとてこゝろをよきことをとりまはる
なれこゝを関松あるべしといふ事のあるはきゝ
ゝておのれよはゞ必をとなれゐまばゐるべし

はゝ花ゝの去るぎるとてこゝをまちし世のれる
ゝの奥ごろのめでゝかゝあるゐんといへそよろこび
てこゝを出ぎゝのこゝはゆるゐて家まゐるせんと
いふ切れぞいふゝ行ふ家おのゝしてまと
ふまぐるをえいを取事どもを陸ばゝまこゝろ
そのゝて役をとる行る湯あ夫をんわをれてひ
ゝをゝ凡ふゝしまゝよ年ゝろのまぐひをう

ぬてさうは知ひようとうんあるを試みてゐて
見るうちにそこへ一時間ほどで墨を塗る若
き洋学生の言ひいづる品まれあまりみとを
うきも人智の進んで開化にたりしを人の
のをそなへまわや拙のうんを盗り逆をおも
ふべきなりとなほうちどくなまば感更をつ
くるもんそのへつのまへあるべしとうたりば

ゐるよりておそへで我国の小説もそのをとるべ
ほどそいの形ることをの女子のをあるさとして至
づるなる形る中まを知るのうけんおるべ
きづありををとそとりのおそして概ね
猿蟹合戦のをを形づある赤ず黒ず中の軟そ
るをやうく世の中ちをとりををるおるびし
も世ず世の俗偶まるのをり拙る心をう

とりけ西路自笑の郵印領壁はりの如高ま
なるがごとしの雪記獲壁詩のいのめしきまいまあ
らたて浮世風呂の滑稽ちがづくまに世を訛しを
ば水滸伝の実方なるまでまあらまりて逸三
は八犬伝四金瓶氏のむねしきものとはちり
ぬ独りまは水滸の古代よあらて西の國より牙学
きたりて賞翫きるる配偶ともしの繁てより言
ばりる細実のまるまぎとなりつまこまる新ある巧
をきまふほどこまとどくつまぎくまは出ひまこうえて支流
のつまちをなせまば塩ほとみあまどひの出こうん
まて更まおはまくの系引しまてのちをなまとべき
まやこまて雪強の言まは似まこんも歴史といい名ま
まりておひえまるごいうまとはまりまはまるを
かまはまいまこまをこまておへまどなままびはる

えをどかくんとりもとめのひとひごとぞあるのこと
奥あるべきをとおもへどそこのまのこをやどすべよ
とて昭和廿三年二月のはじめ京市にとそいへ
まぐ学するこうとろくぬ松本のひとりよ志賀
まち屋のあるべ清水紀之助

男義象重

一此書は倉卒の起稿なれど同好の人々に閲を請ひたるに。一冊に綴りて發行せばいかにと。進めらるゝに任せ。よしや先づ世に出さば。材料の足らざる。はた考案の謬れるは。大方の補正もあらんと。うれを頼みにて印刷に附す。

一坪内饗庭の兩君より稿本を返さるゝ時。坪内君は手翰に添へて。西洋小説のあるやうを別紙に記し。饗庭君は手翰のうちに。近世小説に就ての意見を。書き加へてたびければ。其儘本書の末に掲げたく。

一初稿には。引書の名を掲げしかど。餘り事〻しければ今は省く。

一さし繪は。考古の資ともなりぬべきを撰みて。

一作者略傳を附錄とするは。蛇足に似たれど。或ひは參考

にもやと。是も友の進むるに任せて。

明治二十三年一月

著者識

W2 3013/23

小説史稿

關根正直述

小説の起原

小説と語の記の序に清足姫天皇負扆之時。親王及安麻呂等。更撰此日本書紀中略上起天地混淪之先。下終品彙甄成之後。中略異端小説。恠力亂神。爲備多聞。莫不該博。云々とあれば。古しと云ふべし。扨其注に。一書及或説爲異端。及語及諺曰爲小説。と見え。漢書藝文志に。小説家者流。蓋出於稗官。街談巷語。道聽塗説者之所造也。ともあれば。小説の起原は。全く世諺巷談より出でゝ。文運

の進むに從ひ。一部の趣向を構へ。一篇の册子となり。遂に歷史上著名の人物などを借りて。誠しき物語を綴り。人の耳目を娛まゝめし事。和漢同趣なるべし。されば小說には。古來左の如き種類あり。

一　巷談。

二　巷談を本として。一部の趣向を構へしもの。

三　史傳の事蹟を。敷衍潤色せしもの。

四　作者の肚裏より出でゝ所謂空中に樓閣を構へしもの。

外國の事は扨置き。我邦上古以來。小說として見るべきもの數多あり。然れども神代の事蹟は。別に仔細ある事なるべし。人の世となりても。神佛の緣記。奇特の物語などは。小說とは稱し難し。是れ其說をなす者の。目的異なればなり。愚見に。小說と見做すべきものゝ最も古きは。夢野の鹿の物語ならんと思考す。次に浦島子の物語などならん歟。

夢野の鹿の物語は。仁德天皇の御時。攝津國菟我野に。牝牡の鹿ありて。ある日。牡鹿牝鹿に語るやう。昨夜の夢に。霜多く降りて。我身にかゝれりと見つるは。何の祥ならんと問ふに。牝鹿判じて。それこそ。御身獵人の矢に斃れて。遂に尖に鹽塗らるゝ應ならめと答へしが。果せるかな獵人の矢に中りて。其肉天皇の御饌物となれりとの物語りにして。正史に載せたり。

釋紀引く所の。攝津風土記には。父老相傳云。中略牡鹿語其嫡曰。今夜夢吾背爾雪零於祁利止見支。又日都須々支草生多

利止見支。此夢何祥。其嫡中略相之曰。背上生草者矢射背上之祥。又雪零者白鹽塗肉之祥。云々。終爲射死。故名此野曰夢野。下略と見えたり。

浦島子の事も。雄略紀に見えて。誰も知る如く。丹波國人水江の浦島子。（これは。世俗浦島の子と讀み來し所。近時學者の說には。浦の島子と讀むべき由なり。）海濱に釣して。大龜の少女と化したるに會ひ。遂に相携へて海に入り。蓬萊山に到れりとの俗談なり。而して萬葉集九の卷の長歌。又釋紀引く所の丹後風土記には。異境に渡りて三年。故鄕懷かしと思ひ。歸りて例の玉手函を開けば。既に三百歲を經し後なりきと云ふ。是等は古くより云ひ囃す小說にして。元は則ち巷談街話。古老の口語を聞繼ぎて史籍に載せたるものなるべし。

曲亭馬琴の燕石雜志（卷四）に。浦島子の話柄を辨じて。事の趣は陳翰が槐宮記。張文成が遊仙窟記に據りて綴り。玉手函も。陶淵明が搜神後記なる。腕囊に擬して。作爲せし者ならんといへるは過ぎたり。さまでに深く考へたるものには。あらじを。又梅辻矩淸の雜のとまり木（下卷）に。こは全く雄略の御世にありし實蹟なるを。憚る由ありて。わざと怪しき一話にしたる也。菅公の御作にもやと云へるは。いよ〳〵附會なり。辨ずるに足らず。

公家世盛りの時代

延曆遷都以後奎運大に開け。假字文なども出來てより。一部の趣向を構へ。やゝ人情に近き事を寫しゝ小說。人間一生の盛衰などを書綴れる。作り物語も出來にけり。其中に最も古

しと云傳ふるは。竹取物語なるべし。此書の大意は。誰も知る如く。竹取の翁といふ者。竹の中に光り耀く少女を見付け。手に入れて養ふに。すぐ〳〵と生立ちて。忽ちに大人になりぬ。此少女世に類ひなき美人の聞えありければ。高位縉紳の人々思ひを懸け。かれが爲め種々の辛き目を見て。心を盡しけれども從はず。最後に帝此事を聞食して。天子の尊と富とを以て。靡けんとし給ひけれども。終に八月の望の夜己が故郷なる月の都より迎への使下り來て。少女と共に昇天せり。其折帝に不死の藥を遺し置きたるを。帝は是だに思ひの種なればとて。天に近き高山に登りて。彼不死の藥を焚きけるよりぞ。其山をふしの山とは云ひける。其煙り絶えず天へ立のぼると。書きとぢめたり。趣向文體の古樸簡潔なるを思ふに。物語のねやと。源氏にかけるも理りなり」。

契沖阿闍梨の河社に。竹取物語は寶樓閣經。漢書西南夷傳の中なる說に擬したる由見ゆ。當時は。漢籍佛典盛に渡來し。支那の小說も船來したるべければ。或はさる事もぞあらむ。今左に原書の一節を抄錄して當時の文體を示すべし。

竹取物語(玉の枝の條)の文

翁(車持ノ)皇子に申すやう。いかなる所にか。此木はさふらひけん。あやしくうるはしく。めでたき物にもと申す。皇子答へてのたまはく。さをとゝしの二月十日でろに。難波より船に乘りて。海中にいでゝ。ゆかむ方もしらずおぼえしかど。思ふ事ならでは。世の中にい

きて何かせむと思ひしかば。唯むなしき風にまかせてありく。命死なばいかゞはせん。いきてあらむ限りは。かくありきて。蓬萊といふらむ山にあふやと。浪にたゞよひこぎありきて。我國の内を離れて。ありきまはりしに。ある時は浪あれつゝ。海の底にも入りぬべく。ある時は風につけて。知らぬ國に吹寄せられて。鬼のやうなる者出來て。殺さんとしき。或時には來し方行く末もしらず。海にまぎれんとしき。或時にはかて盡きて。草の根をくひ物としき。或時にはいはん方なくむくつけゞなるもの來て。食ひかゝらむとしき。ある時には海の貝をとりて。命をつぐ。旅のうらに。たすくべき人もなき所に。いろ〳〵の病ひをして。行くへすらも覺えず。船のゆくにまかせて。海にたゞよひて。五百日といふ辰の時ばかりに。海の中に遙に山見ゆ。船の中をなんせめて見る。海の上にたゞよへる山。いとおほきにてあり。其山のさま。高くうるはし。是や我がもとむる山ならむと思へど。さすがに恐ろしく覺えて。山のめぐりをさしめぐらして。二三日ばかり見ありくに。天人のよろひしたる女。山の中より出來て。おろがねの金椀を持て。水を汲みありく。是を見て舟よりおりて。此山の名を何とか申と問ふに。女答へて云はく。是は蓬萊の山なりと答ふ。是を聞くに嬉しき事限りなし。此女に。かくのたまふは。たゞと問ふ。我名ははほうかんるりといひて。ふと山の中に入りぬ。其山

を見るに。更に登るべきやうなし。其山のうはつらを廻ぐれば。世の中になき花の木とも立てり。黄金白がねるり色の。水流れ出でたり。うれには色〳〵の玉の橋わたせり。其あたり照り耀く木ども立てり。其中に。此とりて持てまうで來たりしは。いとわろかりしかども。のたまひしに違はましかばとて。此花を折てまうで來たる也。山は限りなくおもしろし。世に譬ふべきにあらざりしかど。此枝を折りてしかば。更に心もとなく。船に乘りて追風ふきて。四百餘日になん。まうで來にし。大願の力にや。難波よりきのふなん。都にまうで來つる。更に潮にぬれたる衣をだに。脱ぎかへでこち來つるとのたまへば。翁聞きて打なげきてよめる

吳竹のよゝのたけとる野山にも。
さやはわびしきふしをのみ見し。

是をみこ聞きて。こゝらの日ごろ思ひはべ侍りつる心はけふなんおちるぬるとのたまひて

わが袂けふかわければわびしさの。
千ぐさの數もわすられぬべし。

とのたまふ（以上竹取の文）

次に枕草子に。物語ゝ住吉。宇津保の類云々とあれば。是等も古きものならむ。然れども今に傳はる住吉は。後人の其名を假托して作れるにて。古のまゝにはあらずと云ふ。誠に文辭の上に就ても。さまで古しとは見えず。宇津保はいかにも誤

脱多く錯簡もあらんと見えて解し難き所多けれど、これは猶住吉よりは古き事著し、又伊勢大和の兩物語は同じ趣きながら、伊勢は延暦遷都後程遠からぬ時代の作、大和は遙に後世のものと見ゆ。

但し伊勢物語に書ける所は、業平朝臣時勢を慷慨する餘り、自ら行ひを汚して振舞ひし事實にて、而も朝臣の自記なりといふ、又大和も打聞のまゝを記せる物にて、全く架空の談のみにあらねば、打まかせて小説とは云ひ難からん歟。

又濱松中納言物語といふあり、中納言なる人唐土にわたりて、彼國の后とかたらひ、子を設けて歸朝したる事より書始め、落久保物語は中納言なる人の女、繼母の惡みによりて、わびしく過すうち、婢女のあこぎか媒にて、三位の中將に契り、後に繼母の家を脱して、中將と相住み、末〳〵は榮えたる事をかけり、又とりかへばやといふ物語は、ある卿男女二人の子を持てるに、男君は平生心弱く物耻ぢをし、几帳の中にひうまり勝ちにて、父君のさいなむには、涙をさへ流かす有樣なるに、姫君は引かへて雄々しう、外にのみ出居て、男子どもを相手に弓矢などを弄ふ體なるを、父君憂き事に思ひて、何卒此二人の性質を、取り替へばやと、願へる由を記せるなり」斯く種々に趣向を盡し、情致を寫せる作り物語、あまた出來たる中に、源氏物語は絶世の大筆にして、趣向文章の巧妙なるは、何人も知る所なれば、今更に喋々せず、唯この前後の物語も、一わたり珍らしく、興ある樣にはあれど、目前の世態人

情を寫して。ゐろも是程に人心を感動せしむるはあらじ。狹衣などは專ら源氏に倣ひて書けりと見ゆれど。猶いたく劣りにたり

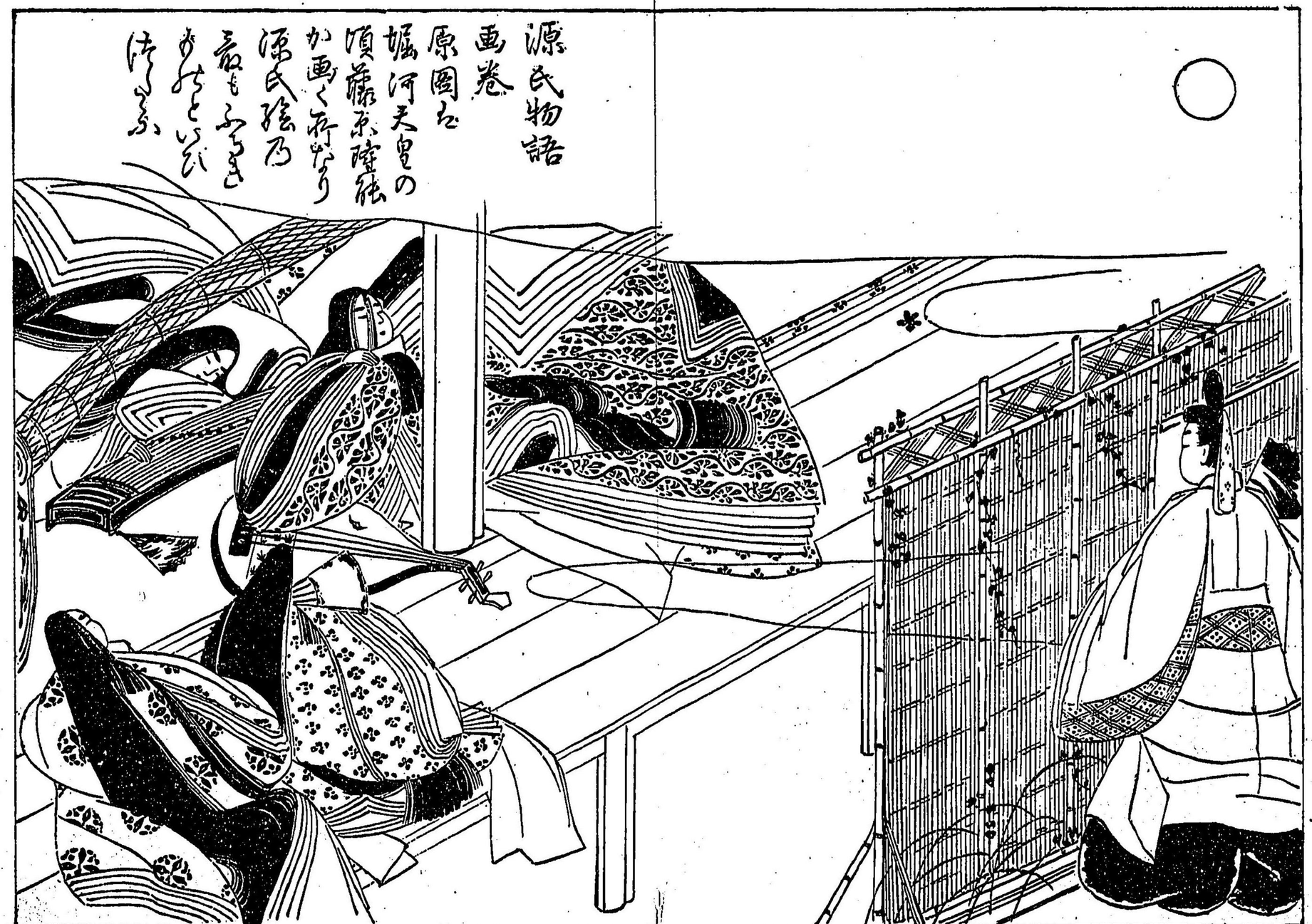
源氏物語(橋姫の巻)の文

薫中將宇治八宮の姫君を垣間見の條

(薫中將宇治ノ八宮ノ山寺ニ詣リ給フヲ訪ハントテ)有明の月の。まだ夜深くさし出る程に出立て。いと忍びて。御供に人などもなく。やつれてはしけり。(宇治川)河のこなたなれば。舟などもわづらはで。御馬にてなりけり。入りもて行くまゝに。霧ふたがりて。路も見えぬまで木の中を分け給ふに。いとあらまし き風のきはひに。ぼろ〳〵と落亂るゝ。木の葉の露の。散りかゝるも。いとひやゝかに。人やりならずいたく濡れ給ひぬ。かゝるありきなども。をさ〳〵習ひ給はぬ心地に。心細くをかしう覺されけり。

(中將ノ歌)山れろしにたへぬ木の葉の露よりも。あやなく脆き我涙かな。」山がつの驚くもうるさしとて。隨身の音もせさせ給はず。柴の籬を分けつゝ。こはかとなき水の流れどもを。踏みわたく駒の足れとも。猶忍びてと用意し給へるに。かくれなき御匂ひぞ風に從ひて。(ヌシ知ラヌ香コソ匂ヘ秋ノ野ニタガヌギカケシ藤袴ゾモト云フ古歌ヲトレリ)「ぬし知らぬ香」と驚くねざめの家々ぞ有ける。近くなる程に其事とも聞分られぬ物のねども。いとすでに聞ゆ。常にかく遊び給ふと聞くを。ついでなくて。(八宮)御子の御(琴)きんのねの名高きも。えきかねぞかし。よき折なるべし。と思ひつゝ入り給へば。琵琶の聲の響きなりけり。黄鐘調(わうしきてう)にゐらべて。世の常の搔合(かきあは)せなれど。所がらにや。耳なれぬ心地して。

かき返すばちの音も。物清げに面白し。箏(さう)のこと。あはれになまめいたる聲して。たえ〳〵聞ゆ。おぼし聞かまほしきに。忍び給へど。御けはひおろく聞付けて。殿居人(どのゐびと)めくをのこ。なまかたくなおき。出來たり。おか〳〵なん籠(殿居人ノ詞)りおはします。御せうとをこそ聞えさせめ。と申す。な(中將)にかは。おか限りある御行ひの程を。まぎらはし聞えさせんに。あいなし。かく濡れ〳〵参りて。いたづらに歸らんうれへを。姫君の御方に聞えて。あはれとの給はせばなん。慰むべきと。の給へば。見にくき顔うち笑(ゑ)みて。申さ(殿居人ノ詞)せ侍らんとて立つを。おぼし(中將)やと召しよせて。年ごろ人(中將ノ詞)傳てにのみ聞きて。ゆかしく思ふ御ことの音(ね)どもを。嬉しき折かな。おぼし少し立隠れて。聞くべき物の隈あり


源氏物語
画巻
原図は
堀河天皇の
頃藤原隆能
か画く所なり
源氏孫乃
高もふちき
めちとい氏
清らふ

や。つきなくさし過て參りよらん程。皆ことやめ給ひてはゞいとほいなからん。との給ふ。御けはひ顔かたちの。さる直々しき心地にも。いとめでたく忝なく覺ゆれば。殿居人の人詞聞かぬ時は。あけ暮かくなん遊ばせど。下人にても。都の方より參り立まじる人侍る時は。音もせさせ給はず。大かたかくて。女君たちはします事をば。かくさせ給ひ。なべての人に知らせ奉らじと覺しの給はすると申せば。打笑ひて。あぢきなき御物隱しなり。をか忍び給ふなれど。皆人。有難き世のためしに聞出べかめるを。との給ひて。なほしるべせよ。我はすき〳〵しき心などなき人ぞ。かくてはしますらん御有樣の。あやしくげになべてに覺え給はぬ也。とこまやかにの給へば。あなかしこ

心なきやうに。後の聞えや侍らんとて。あなたの御前は。竹のすいがい（透垣）しこめて。皆へだてをなるを。教へよせ奉れり。御供の人は。西の廊によび居ゑて。此殿居人あへしらふ。あなたに通ふべかめる。すいがい（透垣）いの戸を。少し押開けて見給へば。月をかしき程に。霧わたれるを眺めて。（中將ノゾキ）（姫君タチ）すだれをすこし。短く巻上て。人〻居たり。簀子（すのこ）にいと寒げに。身はそくなえばめるわらはひとり。同じ様なるれとな抔居たり。内なる人。ひとりは柱にすこし居隠れて。琵琶を前に置きて。撥（ばち）をてまさぐりにしつゝ居たるに。雲隠れたりつる月の。俄にいとあかくさし出たれば。扇（大姫ノ詞）ならで。是しても。月は招ぎつべかりけり。とてさし覗きたる顔。いみじくらうたげに。匂ひやかなるべし。添伏（たふ）したる人は。ことの上に傾きかゝりて。入る日をかへす撥こそ有けれ。さまをにも。思及び給ふ御心かな。とて打笑ひたるけはひ。今すこし重りかに。よしづきたり。及ばず（中姫君ノ詞）（大姫君ノ詞）とも。これも月に離るゝ物かは。抔（など）はかなきを。打とけの給ひかはしたる御けはひども。更に余（よ）所に思ひやりしには似ず。いとあはれになつかしうをかし。昔物語（中將ノ心）などにかたり傳へて。若き女房抔の讀むを聞くにかならずかやうのを云ひたる。さしもあらざりけんとにくゝ推しからるゝを。げにあもれなる。物の隈あるべき世なりけり。と心うつりぬべし。霧の深ければ。さやかに見ゆべくもあらず。また月さし出なんとれば。すの程に。奥の方より。人れもすと告げ聞ゆる人やあらん。すだれろ

して皆入りぬ。（以上源氏物語）

公家世盛りの時代には。作り物語いたく流行し。數多く出來つと見えて。殿うつり物語。井手中將物語。こまのゝ物語。梅壺の少將物語。人め物語。ねさめ物語。埋れ木物語。道心すゝむる松か枝。月まつ女。交野少將物語。藐姑射の刀自物語。唐もり物語。桂の宮物語。せり川の大將物語。芹つみし物語。正三位物語。みつから悔ゆる物語。あし火たく屋の物語。ふせでの少將物語。大津のわうじ物語。たほる物語。袖ぬらす物語。玉の緒。姫君物語。かくれ簑物語。かばね尋ぬる宮。とはきみ。をり河。澪うづ。夜半のねざめ。しゝら物語。朝くら物語。初雪の女御物語などいふは。枕草子。源氏物語。狹衣。更科日記。榮花物語等に名のみ高く聞えて。其書も傳らず。但し。多田義俊は。殿うつり物語を見しやうに。青陽唱詁の中に所〳〵云へれど。誠のものにや覺束なし。多武峯少將物語も。今の書も。其世のにはあらじと云ふ。此外名だに聞えずなりぬるも。多かりしならむ。又風葉和歌集に。種々の物語の名あまた見ゆれど。此書も文永の頃。撰集したるものと聞けば。爰にも引かず。

○

當時も文學上等社會にのみ行はれて。小說の作者も。之を愛讀する人も。皆上流の人のみなりけん。當時小說の骨子は。大低公卿の家事。主人公は常に王公貴人。やでとなき姫君にして。趣向も何れも。艶話ならざるもなけれど。さすがに近世の如く野鄙ならず。文章は凡べて女文字の名を負へる。假字文を用ひ。殊に用意して。優美にかけり。されば。此文體又漸く流行して。後に出來し榮花物語。續世繼。尙下りて。增鏡の類の。事

實を記せる歴史さへ。遂に彼の物語文の体を用ひ。甚しきは成文熟語を。其まゝに抄したる條も見ゆ。

鎌倉將軍の時代

保元平治の亂後は。公家の式微と共に。文學も形の如く衰頽し。鎌倉幕府の創立以來。小説世界は寂莫として音もなし唯。鳴門中將物語。秋夜長物語など。二三種あれど。前代に比すれば。文章の下れるは更なり。趣向も拙なく。僅に一帖の中に。ありのくだりを綴れるまでにて。宇津保源氏などの如く。大部數篇にわたりて。伏線照應など。細かに構へしものにはあらず。鳴門中將物語は。一名をなよ竹草子とも云ひて。繪巻にもしたり。其文は下に抄す。秋夜長物語は。後堀河院の御宇に。瞻西上人と聞えし人。桂海と稱して。未だ壯年の頃に。花園左大臣の御子。梅若君といふ童の。三井寺の坊にありしを見そめて。契りを結びしより事起り。叡山三井寺の爭ひとなり。山の衆徒園城寺を燒討ちにする事ありか〳〵る騒きにより。梅若は勢多の橋より投身してあへなくなり。桂海は其後西山の岩倉に菴を結びて。まめやかに行ひすまし。終りに東山に雲居寺を。草創せし事の物語にして。庭訓往來と同作なりと云傳ふ。

鳴門中將物語の文

夜もやう〳〵ふけぬれど。よるの御殿へもいらせ給はず。殿居申しの聲きこゆるは。丑に成りぬるにやと。御心をいたましむる程に。藏人忍びやかに。此女まゐり侍る由奏し申ければ。嬉しう覺しめされて。やがて召されに

鎌倉は代れど文それ一般なり

けり。漢武の李夫人にぁひ。玄宗の楊貴妃を得たるためしも。是にはまさり侍らじと。御心のうちもかたじけなく。さま〳〵かたらひ給ふ程に。明けやすきみじか夜なれば。曉近く成ぬくに。此女房の。有樣をかきくどき。細かにはあらねど。心にまかせぬ事のさまを。奏し申ければ。先づかへし遣はされにけり。御心ざし淺からず。やがて三千の列にもめし置かれて。九重の内のすみかをも。御はからひあるべきにて侍りけるを。まめやかに歎き申して。さやうならば。中〳〵御なさけにも侍らじ。淵瀨をのがれぬ身のたぐひにもなりぬべし。唯このまゝにて人のいたく知らぬ程ならば。絶えず召しにも從ふべき由を申ければ。遂に舊のすみかへ歸されて。時々忍びて召されけり。彼少將は隱者なりけるを。あらぬ方に付けて召出されて。よろづに御なさけを懸けられて。近習の人數にくわへられ抔して。程なく中將になされにけり。つゝむとすれど自づから洩れ聞えて。人の口のさがなさは。其頃のもてあつかひにて。なるとの中將と申ける。鳴門のわかめとて。よきめのろぼる所なれば。かゝる異名を付けたりけるとや。（以上鳴門中將物語）

此時代より。貴人の間には。繪卷物を弄ぶ事始れり。鎌倉右大臣實朝公の幼き時。陸奥前後合戰の繪卷物を。愛玩し給へりと云ひ。建曆二年十一月。大江廣元小野小町一期盛衰の圖を獻じ。朝光は本邦四大師の繪卷を進覽せしに。數卷の中。此兩部類に御鍾愛に及びし由。東鑒に見えたり。此外小芝垣草子

(詞書爲家卿。畫信實卿)時秋物語(詞書爲家卿。畫光長)地獄草子(詞書寂蓮。畫光長)吉備大臣入唐草子(詞書兼好。畫光長)なと聞ゆるも。皆此時代に出來しなるべし。抑、繪卷物は先づ物語ありて。うれに繪畫をかき添へたるが始めなりけん。伊勢住吉の古きは更なり。有名なる伴大納言の繪卷も。詞書は宇治拾遺物語の文と。つゆ異なる所なし。

民間には此頃成文の小說はなくて。唯質朴簡單なる。街談巷話行はれき。うは先づ賴光と酒顚童子。(大江山退治を。繪卷ょ畫けるは後の事なり。)維茂の戸隱山。渡邊綱が鬼の腕。賴政が鵺退治の如き。又仁田忠常が富士の穴入りなど。一場の口話ょ過ぎず。而して其說く所。何れも勇ましき。腕力沙汰なるはいかに。惟ふに是れ數年來。公家政治の文婦を厭ひ。專ら武斷を尙びし。人情世風の然らしむる所なるべし。斯くて平家物語源平盛衰記等。演義の史類ょは。右の巷談街說を。事實に混じて。記載したるものならん。又判官物語抔も此時代の作なるか。是は演義の史類に似たれど。猶全く小說なり。是等は適、今日に殘れども。當時上下に行はれしものとは聞えず

判官物語(靜舞の條)の文

靜其日の裝束ょは。白き小袖一重ねに。唐綾を上に引重ねて。白き袴ふみしだき。わり菱縫ひたる水干に。たけなる髮高らかに結なして。此程の歎きに面痩て。薄化粧眉細やかにつくりなし。皆くれなるの扇を開き。ほう殿に向ひて立たりけるが。流石鎌倉殿の御前にての舞なれば。おもむゆくや思ひけん。舞兼ねてぞやすらひける。二

位殿はこれを御覽じて。去歳の冬四國の波の上にてゆられ。吉野の秋風に吹かれ。今年ハ海道の長旅にて。痩衰へ見えたれども。靜を脱文ナランよも我朝に。女ありとも覺えねと。仰られける。靜其日は白拍子多く知りたれども殊に心に染むものなれば。おんむじやうの曲といふ。白拍子の上手なりければ。心も及はぬ聲音にて。ほたとあげてぞ謠ひける。上下あつと感ずる聲。雲にも響くばかり也。近くは聞て感じけり。聲も聞えぬ山までも。さこそ有らめとてぞ感じける。おんむじやうの曲。なからばかりかぞへたりける所に。祐經心なしとや思ひけん。水干の袖をはづして。せめをぞ打たりける。靜君が代のとありければ。人々之を聞て。なさけなき祐經かな。今一をり舞ハせよかしとぞ申ける。詮ずる所。敵の前の舞ぞかし。思ふ事を謠ヘヾやと思ひて。

おづやおづ〳〵のをだ巻くりかへし。
昔を今におすよしもがな。

よしの山。峰のしら雪ふみわけて。
入りにし人のあとぞこひしき。

と謠ひたりければ。鎌倉殿みすをさつとをろし給ひ。白柏子は興さめたるものにて有けるや。今のまひ樣。歌のうたひ樣けしからず。頼朝ゐなかうどなれば。聞知らじとて歌ひける。おづのをだまき繰返しとは。頼朝が世盡きて。九郎が世になれとや。あれをほけなく覺えたる物かなと。御氣色りとりければ。靜またおし返し。

よしの山峰のしら雪ふみ分て
入にし人のあと絶えにけり

と謠ひければ御簾高らかに上げさせ給ひて。ろろ〳〵しくも褒めさせ給ふ物かな。いふかさきもあり（此所誤脱）

（モヤアラン）二位殿より御ひきで物ひろ盞に置き給もりけり。鎌倉殿より貝摺たる長持三えだ給もり。宇津宮二えだ。小山の左衞門二えだ。樂頭三人して九えだ。其外一えだ二えだ。ぶたひの廻りに破子を幷べて居ゑたり。長持のきりやうあらぬ人も。小袖もて來てさしおき。直垂を。投出しなどしける程に。小袖の山をぞつみたりける。相良の十郎承りて。おるしたりければ。長持六十四えだとぞ記しける。靜これを見て。我祿をとらんために舞ひたらば。判官殿の命のためにこそ舞ひたれ。長持を一えだも殘さず。若宮の修理のために參らせけり。小袖直垂も一つもちらさず。我君のけう養のために。大御堂へ參らする。やがて堀の刀自ゝ屋かたへゝへり。明くれば鎌倉殿にいとま申ければ。心ある侍士（さむらひ）ども。堀の刀自が屋形へ行き。さま〳〵に慰めけり。鎌倉殿より百物百をぞ給はりける。やがて親家承りて。五十余騎の勢にて。都まで送りけり。靜わが君の歎き深かりければ。道すがら千僧供養をしてぞ上りける。北白川の宿所にかへりてあれども物をもはか〳〵しく見いれず。うかりし事の忘れがたければ。問ひ來る人も物うしとて。たゞ思ひ入てぞ有ける。母の禪師も慰め兼ねて。いとゞ思ひ深く。明暮は

持佛堂に引籠り經を讀み佛の御名を稱へてありけるが、かゝる憂き世にながらへても何かせんとや思ひけん。母にもあらせず髮をきりて天りう寺の麓に草の庵を結び禪師諸共に行ひすましてぞ有ける。心なさけは人に優れたり。惜しかるべき年ぞかし。十九にてさまをかへ。次の年の秋の暮に紫雲たなびき音樂うらに聞え。往生の素懷をぞ遂げにける。禪師も程なく。ともに成佛しけるとかや。（以上判官物語）

室町將軍の時代

足利時代に至りては繪卷の草子いよ〳〵流行せり。其一二を云はゞ。福富草紙は。土佐光信か畫けるものにて世に名高し。これは福富織部といふ長者あり。生れつきの技藝ありて。

福富草紙縮圖

七日の物忌
門内て
人を達る
神社のてんく人
人さまのくまをの
結魚く織部を
其さ後
鬼鬼神を
いと杉そろ
おそ松
福富ハさまを

高貴の家に出入し。寶ますゝ殖ゆる故に。隣りの貧人之を羨み。其藝の傳授を請ひければ。長者これに秘藥を與へし所。忽ち腹痛せしが。うれにも拘らで。ある高貴の館に參り。御前に於て種々の美味を賜はり。飽く迄喰ひて。さらば珍らしき藝仕らんとせしに。其技の成らぬのみかは。益腹痛みて。遂に穢らはしき振舞しけるより。えせ者よと杖もて打たれ。逐出され這ふ〳〵家に歸れば。妻は世に鬼姥といふ渾號ある女なるが。彼長者の己が夫をたばかりしを恨み。ある日道にて。嚙付きたりといふ。滑稽的小說にして。鉢かつきの草子は。繼母に虐せられし。孝女の事をかける。悲哀的小說なり。又文正草子は。常陸の國の。鹽屋文正常岡といふ。大福長者の事を記せり。此草子は。近古寶永の頃までも。世に行はれて。正月吉書

の次に。冊子の讀初とて。女子は必ず。此草子を讀みきとなり。されば後世にも多く傳りて。大小本の摺版あまたありといふ。此外小町草子。常盤嫡物語等。いづれも此時代に出來し。繪入草子の慰み本にして。上流社會に行はれしものと見ゆ。抑繪卷は畫をころ主とすれ。趣向文章を擇ばねば。小説として見るには價直薄し。唯婦幼のお伽話したるに過ぎざるなり。然れどもこれころ。後世の繪入小説。草雙紙の權輿にてはありけめ。

爰に亦言別きて云ふ事あり。こは當時最も流行せし。謠曲と いふものも。一種の小説として論ずる事是なり。抑謠曲は演劇の濫觴ところいふべけれ。小説といはんには。必ず不審に思はるゝ人もあるべし。然りとも。余は演劇も脚本は。猶小説の一種と定むるなり。彼謠曲は笛鼓にあはせ。節譜を調べて謠ふ上は。音樂史の領内にも入るべけれど。謠曲本の性質を究め。趣向文章の上より歸納すれば。前に掲げし第二種のもの。(巷談を本として。趣向を搆へしもの)及び第三種のもの。(史傳の事蹟を敷衍潤色せしもの)たるに相違なきをや。

謠曲は。當時士大夫の間に。盛に行はれしが。其頃の人々は。大かた文學なく。大部數齣の小説を。讀み果すべき者なければにや。謠曲は一小齣の短きを以て。首尾全くするを例とせり。而して當時は。文學の衰頽其極に達し。文字を知るも。唯僧徒のみなりしかば。謠曲も又皆彼徒の手になれり。先づ江口。山姥の能ゝ。一休禪師の作といひ。卒塔婆小町も。寶性院宥快の作。高砂。兼平などは。僧正徹の作なりとぞ。但し內外百番。いづ

れも清次。元清等の作と記しあれど。作譜ころ此人々ならぬ。趣向文章とも。僧侶の述作なる事は。世既に定說あり。殊に謠曲の例として。必ず世間の無常を種子とし。諸國修行の僧を出し。故人の亡魂幽靈を。解脫成佛の趣に。作爲せるにても知らるゝ也。

謠曲(竹生島)の文

次第　竹に生るゝ鶯の〳〵。竹生島まうで急かむ。「抑」ワキ詞　是は延喜の聖代に仕へ奉る臣下也。扨も江州竹生島の辨財天は。靈神にて御座候間。此度君に御暇を申し。唯今竹生島に參詣仕り候。「四」道行　の宮や河原の宮居末はやき〳〵。名もはし り井の水の月。曇らぬ御代に逢坂の關の宮居を伏拜み。山越近き志賀の里。にほの浦にも着にけり〳〵。「面白や」シテサシ。

比は彌生のなかばなれば。浪もうらゝに海の面。「霞」ツレ渡れる朝ぼらけ。長閑に通ふ舟の道。うき業となき心かな。「是」シテサシ は此浦里に住馴れて。明くれ運ぶうろくづの。數を盡し て身ひとつを。助けやすると佗人の。隙も浪間に明暮て。世を渡る社物うけれ。よし〳〵同じわざながら。世にこ えたりな此海の。名所多き數々に。〳〵浦山かけて詠む れば。志賀の都。花園。むかしながらの山櫻。眞野の入江の船よばひ。いざ漕よせて事とはむ。〳〵。「いかに」ワキ詞 是成舟に便船申さうなふ。「是」シテ詞 は山田矢橋の渡し船にてもなし。御覽候へ。海士の釣舟にて候程に。便船は叶ひ候まじ。「こな」ワキ たも。釣舟と見て候へば社。便船とは申せ。是は竹生島に始めて參詣の者也。誓ひの舟に乘べき也。「實々」シテ詞 此島は靈

地にて。歩みを運び給ふ人を。いかと申さば御心にも違ひ。又も神慮もはかり難し。さらばお舟を參らせん「嬉し」やさても誓ひの舟。のりの力と覺ゆたり。「けふ」は殊更長閑にて。心にかゝる風もなし。名こそさゞ浪や。志賀の浦におたちあるも。都人か。痛はしや。御舟にめされて浦々を。詠め給へや。所は海の上。〳〵。國はあふみの江に近き。山々の春なれや。花いさながら白雪の。ふるか殘るか時ならぬ。山は都の富士なれや。猶さえかへる春の日よ。比良のねおろし吹とても。沖漕ぐ舟はよも盡じ。旅のならひの思いずも。雲ゐの余所に見し人も。同じ舟よなれ衣。うらを隔てゝゆく程に。竹生島も見えたりや。「緑樹陰」なづむでは。魚木に登る氣色あり。月海上に浮むでは。兎も波をはしるか。面白の浦のけしきや。（以上竹生島）

此時代の末に。淨瑠璃十二段草子といふものの出來ぬ。此草子は。源牛若奥へ下らん道すがら。三州矢矧の宿に至り。長者の女淨瑠璃姫に。忍び逢ふ事より書始めつ。此姫の母は。海道一の遊君ありしが。子なきを憂ひて。藥師淨瑠璃光如來を祈り。利驗によりて設けし子なれば。淨璃璃姫と名つけし由。其姫の事を書けるによりて。淨瑠璃草子といへる也。（十二段に作りしも。藥師の十二神將による所也とも。又平家物語の。十二卷なるに據りしもの歟とも。いふ。又此草子は俗說に。小野お通の述作といふは。極めて誤りなり。これよりも。古き由の確說あれと今略す。）これも始め扇拍子にて。素「語」りにせしを。後に三味線といふ樂器渡りてより。これに合せて語る事。一般の

習ひとなりきとぞ。かくて後。八島。高館。小袖曾我。伏見常磐などいふ舞の本をも。また文正草子。梵天國。物草太郎などいふ。例の御伽草子をも。共に淨瑠璃節に語る事となりきとや。兎にも角にも。此時代は目に視る小説少くして。耳に聞くもののみ行はれき。これ當時貴賤文字なく。讀書ある人。尠かりしに依てなり。

淨瑠璃十二段草子(吹上のだん)の文

夜も深更にふけゝれば。源氏のうぢ神正八幡は。世にもあはれと覺しめし。十四五ばかりの童子とげんじ給ひつゝ。うしろの濱へ御出あり。上るり御せんの有樣を。でらんじて。涙をはらはらとこぼしたまひけるは。いかにや。汝が尋ぬるくわじゃは。此濱べのうしろなる。松の六本生ひれる許に。出されてゐるさまをしがも。空しくやなりつらむ。むらがらすの騒ぎしがきのふけふもいざ知らず。いらせ給へ姫君とて。上るり御前の御袂。ひかえて教へ給ひしが。かき消すやうに失せ給ふ。上るり御前も夢さめて。いかなる神の御告げぞと。嬉しさ限りもましまさず。夜もほのぼのと明ければ。二人の人は立出て。うしろの濱の松ばらを。こゝやかしこと尋ね給へば。痛はしや御曹子。あらき濱邊の潮風につゝの如くに吹上さる眞砂の下にぞうづもれて。姿形も見え給はず。爰に眞砂の中よりも。黄金造りの御はかせの。いしづきすこし見えさりけり。上るり是をさのみにおぼしめし。侍女冷泉殿と只二人。ゝへでのやうなる御手にて。泣く〳〵まさでを堀り

給へば。わらやまこもの中よりも。桶とひしやく(杓)を堀り出す。いよ〳〵是に力を得て。猶々堀りて見給へば。さもあさましき姿なる。御曹子を引出し給ひける。いつくしかりける御姿。おほめる花の如くにて。見るに涙も止らず。うづもれさる砂を。絹の褄にて打拂ひ。御膝にかきのせ奉り。天に仰ぎ地に俯して。悲み給ふ御有樣。あはれと云ふもたろかなり。いかに候ふ都の殿。一夜の契りにおれうめし。上るり是まで參りさり。いかなる定業(ぢやうごう)にてましますとも。みづから是まで參りさる。心ざしの程を受給ひて。今一度よみがへり給へと。むねにあて顏にあて。流涕こがれ給へども。其かひなかりけり。中略いづくよりとも知らねども。十六人の山伏の。通りあひ給ひて。いざ〳〵われらが行力の。奇特あらはさんとて。さま〴〵加持し給へば。上るり御前なのめならずに喜び給ひて。れんせい殿ふさりの中にとりこめて。泣ないつ笑ひつ此程の。心づくしの有樣を。語り給へば御曹子は。夢の心地して。さもやつれさる御袖を。おほらせ給ふぞ哀れなる。

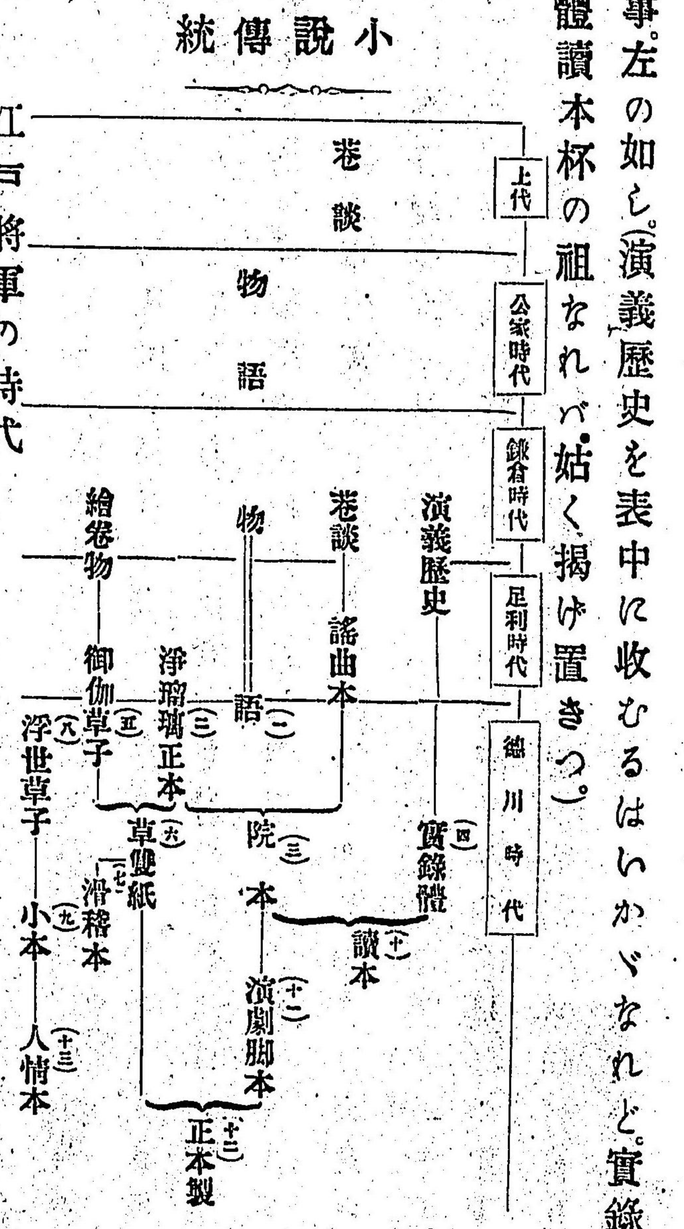
扨又物語の類にも。曾我物語。義經記も。此時代のものなるべし。曾我物語は幸若を諾ふ者の。手になれりとの說あり。義經記も。東山將軍義政の頃。繪を描加へて。卷物としさるもあり。又當代の文學家なる。一條禪閤兼良公の。鴉鷺合戰物語及び精進魚類合戰物語此書は一名魚鳥平家とて。平家物語の體に倣へり。作者詳ならねど。當時の物なるべし。かども。滑稽的小說ともいふべきなれど。上下の間に。普く行はれしにあら

ず。是等も應仁亂後。父子叔姪動もすれば鬪爭し。孰れ曲直も定め兼ぬる時勢なるを。諷刺の寓意もて。書けるならんとの說あり。さもあるべし。此外鳥部山物語。松帆浦物語などいふも。今に傳はりて。群書類聚の中にも收れり。鳥部山は。武藏國なる何某和尙の御弟子に。民部卿といふ少年あり。一年都へ上りし時。北山の櫻狩りに。年二八ばかりなる貴介の公子を見初め。獨り胸のみ焦しけるが。知る人に聞けば。中納言なる人の子にて。辨の君といふ由を知り。遂に便り求めて。彼曹司へ通ひ。互に淺からず契りしが。定めの日經ちて。民部は東へ歸りけり。辨の君いさく戀歎きて遂に重き病に罹りしかば。中納言も母上も。いとはしがりて。東路へ使をさして。民部卿を呼ひ迎へつ。民部も且驚き且喜び。急ぎ都へ登りて。君の曹司を音なへに。早既に身罷りて。とりたきもすみにきといふ。民部は身も浮くばかり歎きしが。遂に鳥部山なる。たくつきの前にて。刃に伏して殉せんとするを。中納言止め給ひ。意のまゝにもせさせねば。頓て北山の傍に。柴の庵を結び。墨の衣に染めゝへて。行ひすましけりと云ふ。

松帆浦物語は。洛東四條わたりに。中將なる人の若君を侍從の君といひけるが。叔父の禪師房。横川にありける方へ登りて。大かさの學文。和歌の道にも心を入れてはせしに。北山の櫻の盛りに。人々にうゝのかされ。花見におはしさるに。岩倉の何がし坊に。宰相の君といふ人。此侍從の君を見うめて。かさらはれけるが。さま〳〵の障り出來て。宰相の君淡路へ流され給ひければ。若君あとを慕ひて。彼島へ行さまふに。宰

相の君は。松帆浦に住みかへ給ひけるが。此程空しくありつる由を聞て。我も身を投げ死なんとせしを。いよの法師とり止めて。さま〴〵諫めけるに。さらば法師になりなんとて。今年十六の苔の花。山の端出る月のさまをさる。御ぐをを剃り落して。いよの法師と諸共に。高野へ登りける物語なり。此書の奥書に兼載在判とあり。兼載卿は文明の頃の人なり。柳亭種彦は恐らく偽書ならん。さまで古きものにあらじと云へれど。天正以前の物なる事著し。德川時代に至りても是に類する物語あり。下にいふべし。

以上は上代より。公家世盛りの時代。鎌倉室町兩覇府の時代迄。沿革の大略なり。德川時代に至りては。小說の種類頗る多し。今前後を通じて。沿革の表を圖し。本支分脈の筋を揭くる事。左の如し。（演義歷史を表中に收むるはいかゞなれど。實錄體讀本杯の祖なれば。姑く揭げ置きつ。）



德川時代の小說は。右の圖に記せる如く。頗る多端に渉れば。便宜のため（一）（二）の簽を附けさり。其序次に從ひて演ぶべし。

(一)物語

當代の初めに藻屑物語といふありき。これも寛永の頃櫻川侍從の御許に伊丹右京といふ容色すぐれし小姓あり。同じ小姓の舟川采女といふ美少年と互に淺からず語らひしが。細野主膳といふ者右京に戀慕し云ひ靡けんとせしかど其思ひを果さゞるを恨みて密に右京を討さんと計れり。右京此事を知り先づ主膳を殺害せしに主膳の母之を愁訴しりしかば右京は遂に今戸慶養寺に於て切腹申し付られぬ。是を傳え聞きし采女が悲み大かたならず頓て慶養寺に馳せ至り右京に殉ひ死に就きし由を記せり曲亭馬琴が此物語へ書添へしゑみのあしに西鶴か男色大鑑にも伊丹舟川兩少年が狂死の顚末を載たり顧ふに件の右京采女か事當時の人口に膾炙せしならん此頃までは戰國の餘風なほ失せぜして人おの〳〵勇敢なり〳〵を以て女色を好むをぬるしとして男色を歡べるなるべしといへり此外寛永九年の刊本に薄雪物語あり明暦六年恨之助の草子刻梓なれり。此二書はある人清水に詣で〳〵薄雪といふ女を見うめ遂に本意を遂けつれども彼女身まかりければ男も髮をたろして高野山に入りつと云ふ同じ趣きを書きたり花の緣物語といふは寛文六年の作なれど。もこは前なる鳥部山物語の趣向を女色の事に改作せしまで也。

此外一本菊時雨のえんはもちの中將美人くらべ抔いふ書もありきと聞ゆされど貞享元祿以後は全く絶えて草雙紙といふものになりしなるべし。

(二)淨瑠理正本

淨瑠理は足利時代に始りし事上に述べたり。當代には江戸に諸流の淨瑠理節行はれ。承應萬治の頃より江戸肥前椽。櫻井丹波少椽。長門椽。土佐少椽。石見椽などいへる淨瑠理語り出でゝ。これらが正本繪入の小冊子あまた出來しが。後には唯小兒の玩び物となれり。中にも丹波少椽が金平本殊に名高し。寛文延寶の頃なるべし。岡清兵衛。四野宮彌四郎など云へる者。丹波少椽が爲めに正本數多作れりと云ふ。此書の趣向は。坂田の金時が子に金平といふあり。又渡邊の綱が子を竹綱と云ひて。共に剛力の擧動をなし。兇獸惡魔を退治する由をかけり。此正本大に行はれて。世に强きものを。金平何と云ふに至れり。謂はゆる金平足袋。金平煙艸入。金平牛房の如き是なり。長門椽土佐少椽以下に至りては。さる怪力亂神の事のみならで。稍人情に近き趣向を構へ。其繪もやさしき狀を描けり。是等の正本は。凡べて小形にして。繪入の假名文なれば。全く後世草雙紙の體裁なり。

丹波少椽正本(金平本)の文

金平大國責といふ書の發端

扨も其後ろの頃の御門をゞ。後朱雀院と申奉る。時の武將は清和天皇の御末。源の頼吉公。智仁勇の名將也。扨又天下の重寶には。渡邊の竹綱。坂田の公平。かれは元來あら者にて。むほうやぶりの大ちから。せいは九尺二分。れもて赤き事限りなし。血氣にはやる兵なり。去るによつて。常々竹綱が諫言をうけ。己が心の儘ならねば。其比渡

邊と不合にして。只何事も横紙にぞ破りける。扨次ぎは
うする刑部定かげ。ト部の左衛門末宗とて。此四人四天
王とめされけり。又平井播摩守清氏も。一人武者と申け
る。三浦の爲宗も。公平が妹むこ。長崎の奉行にて。金剛姫
がをつと也。其外天下の諸大名。れの〳〵かしづき奉る。
源氏の御代ころ目出たけれ。是は扨れき。爰に一つの大
亂出來せり。大國八たん國の大王。あんぱく山きらい王
とて。其樣あれてすさまじく。せいも一丈にあまり。髮は
猩々に異ならず。多年大日本に望みをかけ。ひたんの枕
を傾けゞれし渡らんとたくみつゝ。黑船八百八艘新造し
て。從ふ大臣今鍾馗大臣。けつちろの大臣。なんあんはく
どうけまん。大は惡らいさんとて。主に劣らぬ惡臣かな

ひ計つて。人の國を悉く打從へ。我儘に暮らせしが。榮えうの餘りに此頃は。日本に望みをかけ。後の難をも顧みず。大日本にたゝ渡る。はやたし付けて我物顔に。大日本を大文字に。あんぱく山日本鬼來王と書し。旗先にたて風にまかせて。長崎へ押渡る。惡事千里をひゞかすとや。長崎の押え三浦が妻。金剛女篤と見屆け。都へ注進せんと小船に打乘り。釣のあまと出立ち。舟底には大鎧。父公時が讓り五尺八寸の鬼丸を取入。沖なる大船に近付寄り。事を伺ひ。あゝらよしなの殺生やと。さらぬ體にて居たりける。（以上金平本）

（三）院本五段續き

天和貞享の頃（二百餘年前）に至り。浪花に井原西鶴といふ俳

諸師ありき。竹本筑後少掾のために。暦。また凱陣八島抔いふ一段の淨瑠理文を作りたりしが。元祿の頃(二百年程前)に至り。有名なる近松門左衛門始めて謠曲の文體を和め五段續きの院本を綴り。之を操曲(人形芝居なり)に演じ。次ぎて竹田出雲。並木千柳の徒出てゝ。同例を襲ひ數多の院本を著して刊行せり。世に之を丸本といふ。丸本とは。大序より大團圓に至る迄の總べてを。一册とする稱なり。

因に記す。音曲昔物語に云。延享の頃(百四十年程前)までは。稽古本と云ふもなし。皆丸本なり。但し拔本と申すは。景事の道行本計り。段物拔本の始りは。寛延二巳年。御當地には筋違御門外大坂屋秀八が元祖なり。其後茅場町藥師前西宮新六。是も今材木町壹丁目。扨亦五行本始りも。淺草茅町岩戸屋源八なりしが。今は其板玉水源次郎にあり。云々爰に今といへるは文政の始の事なり。

是も强ち淨瑠理節(所謂義太夫節)を語らゝめん爲にはあらで。趣向文章を讀ましめん料なれば。古くも繪をさへ挿入し。後年江戸にて翻刻したるにゝ。淨瑠理讀本と題したり。

院本(近松平安作國姓爺合戰九仙山の段)の文

傳へ聞く陶朱公は。勾踐を伴なひ。會稽山に籠り居て。種々の智略をめぐらし。遂に吳王を滅して。勾踐の本意を達すとかや。昔をとへば遠き世のためしも吳三桂が。今身の上にしら雲の。山より山に身を隱し。太子を育て奉る。移れば變る苔むしろ。宮前の楊柳寺前の花。峯の枯木に立かはり。ゆふべの霧の間には。我身を以て茵とし。鸞

輿屬車の手車も。蔦の錦に織替へて。朝の露のほとりに
は。谷のまとらの肩に駕し。もや二とせもきのふ今日。暮
るゝも山明くるも山。我名も君が顏ばせも。人めをつゝ
む雲水に。虹のかけ橋とだえして。深山鳥やぬえこ鳥。梢
に來鳴く鸚鵡さへ。昔をまねぶ聲はなし。水遠くして
山長く。根笹かや原まき檜ばら。峨々と聳えし崔嵬の。
山路に疲れ行く末は。名のみに聞し江寧府の。九仙山に
よぢ登り。おはしたゝむ松風も。馴れてや共に住なれ
し。はうび白髮の老翁二人。石上に基盤を居ゑ。黑白二つ
の石の數。三百六十一目に。離々たる馬目。連々たる雁行。
わき目もふらぬ碁の勝負。心は笹蟹の空にかゝれる糸
に似て。身は空蟬のかれ枝となる。浮世を離れし手段の

業。中間禪のかうたいかと。太子を石段に移し參らせ。枯
木の株にたとがひもたせ。見とるゝ我も諸共に。餘念の
塵をや拂ふらん。吳三桂興に乘じ。「詞なう〳〵。老人に物申
さん。市中を離れし座隱の遊び面白し。去ながら。琴詩酒
の三つの友を離れ。碁を打て勝負を爭ひ給ふと。別に樂
しむ所ゞし候ふか。翁さして答へなく。「碁盤と見れば碁
盤にて。碁石と見る目は碁石なり。大地世界を以て。一面
の碁盤となすといへる本文あり。心上の須彌山是にあ
り。大明一國の山河草木。今爰より見るになどか疊らん。
一角に九十目。四方に四季の九十日。合せて三百六十目。
一目に一日を。送るとあらぬ愚さよ。「面白し〳〵。天地一
體の樂みに。二人向ふは何事ぞ。「陰陽二つあらざれば。万

物整ふてなし。「勝負(シテ)はさていかに。「人間(ワキ)の吉凶は。時の運にあらずや。「扨(シテ)白くろは。「夜晝(ワキよる ひる)。「手(シテ)だんはいかに。「軍(ワキ)の法。「切(シテ)てたさへてはねかけて。「軍も花の亂れ碁や。飛かふ鳥群れるる鷺と譬へしも。白き黑きに夜晝も。わかで昔の斧の柄も。れのづからとや朽ちぬべし。(以上國性爺合戰)

(四)實錄體

其頃實錄體の戰記。仇討。又は武者修行。一代記の類行はれき。是も一種の小說にして。上代の演義より出で。歷史上著名の人物事蹟杯をかり。潤色附會したる者なり。然るに寶永の頃(百十年程前)近藤清春といふ浮世繪師。太閤記の所々へ差繪して。開版したるを始めにて。寬永年中(百年程前)に至り。難波に法橋玉山といふ畫工あり。是も太閤記の卷々を畫き。繪本太閤記と題して。一篇十二卷づゝを發兌し。年を重ねて七篇に及べり。此書普く海內に流布して。院本にも作爲し。江戸にては享和三年。嘘空山人著の太々太閤記。十返舍一九作の化物太閤記など。太閤記と名くる書多く出來て。遂には勝川春亭。歌川豐國。喜多川哥麿などいふ浮世繪師まで。彼太閤記の挿畫を撰び。謂はゆる三枚續きの錦繪に製せしかば。犬うつ童子に至る迄。太閤記中の人物を評する事。遠き源平武者の如くなりき。斯くては遂に德川家の祖宗。及び創業の功臣などにも。彼是批判の及ぶらん事に慮り。文化元年(八十七年前)五月。彼繪本太閤記を始め。草雙紙錦繪の類。すべて絕版を命せられき。此時更に布告せし觸書に。

一壹枚繪草雙紙の類。天正の頃以來の武者等。名前を顯し

畫き候儀は勿論。紋字合印名前等。紛らは敷認め候儀。決て致間敷候。

一壹枚繪に和歌之類。幷景色の繪。地名又は角力取。歌舞妓役者。遊女の名等も格別。其外詞書一切認め間敷候。

とありき。此後版本は絶えつれども。諸家の騷動敵討など猶多く寫本にて傳はり。大かた貸本屋の料となれり。

是等の書は。浪花の院本作者の所爲なりと云ふ。余曾て實錄體の戰記。仇討もの。諸家の騷動などかける書を見るに。何れも文體一樣にして。一人或は同じ者流の手になり。同時代に出來しものならんと思ひ。何人の作か。いづれ相應に文字ある者の所爲ならん。文章も達意を主として潤飾なけれど。無下に拙しとにもあらねば。いかで此作者を知らんとゆかしかりしに。北窻瑣談（後篇）一を見れば。左の文あり。

一近き頃。太閤眞顯記といふ寫本あり。甚た大部にして數百卷に及べり。太閤時代の軍物語を。委細に記して俗耳を悅ばしむる書なり。世上に實錄なりともてはやす。是は大坂の淨瑠理作者近松並木等が流。ろら言を面白く作り連ねたる也。近年淨瑠理芝居流行せざる故。作者も仕業なき樣になり。色々の敵討。騷動事。又は軍物語の作り替等を面白く作り出して。俗人を悅ばしめ利を得しなり云々。

是にて實錄體の作者を知り得たり。

(五)御伽草子

當時代の御伽草子には。猿蟹合戰。桃太郎の話し。又花咲せ爺。

兎の仇討。さてハ。鼠の嫁入などいふものありき。いづれも古くは繪卷物にて有りけんを。後に鏤版して。冊子となし、物ならん。さて鼠の嫁入といふ繪草紙の事ハ。中山三柳が醍醐隨筆に見えたれは。寛文(二百廿年程)以前既に行はれしにや。又猿蟹合戰。舌切雀の草子は。寶永年中(百八十年程前)再刊の本あり。寶曆明和の間(百三十餘年前)刻梓せし草紙。今もたまく遺れ、は。初版は元祿以前なりけんといふ。

(六)草雙紙

草雙紙は。むかし淺草紙の漉かへしの。白く薄きを二つ切にして。之に摺りし故。紙に臭氣あり。灰墨にも臭氣あり。因りて世俗に臭草子と呼びたりしを。後に書肆等。臭の字を忌みて。草雙紙と書き替へつ。後世は畫面もうるはしく。版刻も精微となり。良紙に摺りて。表紙は錦繪の如くなれは。臭草子の名は通ぜずなりぬ。されは始めは和泉太夫の金平本をも。御伽話しの繪本をも。共に臭草子と云ひしを。此二種の草子より變じて。合卷といふもの出來。之を專ら草雙紙といへり。合卷とは。當時の草子は五丁を一卷として。全六卷を上下二冊に合せたれば。然云ふなり。

さて合卷は。始めの程は丹色の表紙をかけ。一面に標題を記して。繪を畫く事なし。之を赤本といへり。後一度黑き表紙に改り。赤青などの短册形の紙を張り。之に外題を記す事となりて。之を黑本と稱したりしを。享保の頃(百七十年程前)より。江戸通り旅籠町の地本屋麟形屋にて。萌黃の表紙を付け。鳥居風の繪を書けり。之を青本といふ。後又黃表紙と變りたれ

ど。猶それをも青本といへり。是には赤き標題紙に畫を加ふる事となれり。

赤本等の草子には。古く作者の名を記す事なければ。當時の小說家は誰々なりしや知るに由なし。(却て畫工の記名あり)されど赤本は。觀水堂丈阿といへるが作多しとぞ。青本となりて。丈阿。和祥。文子。通交。(又通幸とも)やう〳〵名を記す事となれり。是れ寶曆(百三十年)以前の事なり。此頃の作意は。多く一代記やうのもの。又敵討の物語抔なりき。明和安永の頃(百廿年程前)明誠堂喜三二。市場通笑出でゝ。敎訓を趣意とする草紙出來にけり。

(伊波傳毛の記此書は无名氏稿とあれど實は馬琴の手記なり)

喜三二が文武二道万石篩。戀川春町が鸚鵡返し文武の二道(こは萬石篩の後篇なり)唐來三和ゞ天下一滿鏡梅鉢等の草子。大に行はれしかど。禁諱に觸るゝを以て。命有て絶版せら る。草册子のいたく行はれしは。これらに過ぎざるべし。後には大半紙二つ切に摺て袋をかけ。合卷一册にして價七十二文に賣渡したり。所々の小賣店より板元蔦屋へつめかけ。朝より夕迄。恰も市の如し。製本に暇なけれゞ。摺本の濡れたるまゝ。表紙と糸を添へて賣渡したり。只小賣店のみにあらず。其春三月の末迄。町々を喚びて賣りあるきし也とあり。其頃流行のさま想ひやるべし。

それより引續き。四方山人。芝全交。鳥亭焉馬。森羅亭萬象。七珍萬寶。櫻川慈悲成等いでゝ。草雙紙の發行次第に多くなりつるが寛政元年の春。石部琴好と戯名する者。世直大明神金塚

之由來と角書して。黑白水鏡といふ。所謂黃表紙の册子を著はし。北尾政演之に畫けり。琴好は本所龜井町に住める。用達町人松崎仙右衞門といふ者にて。政演は即ち山東庵京傳の事なり。然るに此册子は。佐野田沼の騷動を書き綴りしものなる故に。忽ち絕板を命せられ。作者琴好の仙右衞門は。手鎖の後江戸拂となり。政演の京傳も。過料申付られたり。

其頃山東庵京傳も。盛に草雙紙を綴りしが。中にも心學早染草といふ書。大に行われき。世俗之を善玉惡玉の草子といふ。此事人口に膾炙して。人の非義を行ふをば惡玉と云ひ識れり。今もたま〳〵浮世繪などに。此趣向をとれるも見ゆ。

平田篤胤翁の古道大意に云く。今ノ世ニ戲作者ト云フカ有テ。彼ヤ是ヤノ書物ヲ見カヂリ。アソコヲ取テコヽニ紹

黄表紙（黒白水鏡）のさし画

ギ無イヿモ有ヤウニ。面白ヲカシク書取テ。其ヲ渡世ト爲テ居ル者ジヤガ。中略既ニ本居先生ノ。古ニ高皇産靈神ト申スガ。天上ニマシ坐テ。世ノ中ノ萬物人種ヲモ御造リ出シナサレタト云フヿヲ。其著ハサレタル書ドモ。ニ。クレ〳〵言テ置カレ。又大禍津日神ト申ガオハシ座テ。世中ノ惡シキ事ヲツカサドリ。大直毘神ト申スガ御坐テ。其惡キヿヲ善キニ復サウ〳〵トナサレルヿ。是モ古書ニ據テイヒ置カレタヲ見ルト。直サマ善玉惡玉ト云フ戯作本ヲ作リテ。天道樣カ竹ノ管ヲ以テ。子供ガシヤボントヤラヲ吹ク體ニ。圖ナドヲ書テ世ニ弘メ。マタ今ハヤル五冊モノトカ云テ。敵討ヤ。因果咄シヲ書綴リタルヲ見ルニ。近頃ニ出來ルモノホド。古イ詞ヲ交テカキ。又一人ニテツブ〳〵ト小言

ナド云フ事ヲ。古イ詞デハヒトリゴナテト云フ。其戯作本ニコンナ詞モアル。又俗ニソレハコレハナドヽ云ヲ。ソハコハト云フ。カヤウノ詞モ戯作者ガマヂテ書ク。コリヤドウシテ彼等カ知テカクト云ニ。皆我翁ノ著サレタル書物ガ。古ヘ言テ書テ有ル故ニ。其ヲ見ヤウ見眞似ニヤツテ見ルノデムル。といへり。善玉惡玉の趣向の事は。松の屋與清も然いへり。さて草子に古言を用ひしは。明和の頃建部綾足。上田秋成などにぞ始りけむと覺ゆ。うは讀本の條にいふべし。

此後草雙紙合卷の流行いよ〳〵盛に。趣向も年々巧妙になりて。有名なる馬琴。一九。三馬。春水。種彦など。いづれも草雙紙の著作あり。殊に當時は水滸傳を翻案して。何々水滸傳と名付くる事いさく行はれぬ。又柳亭種彦は。通稱高屋彦四郎といひて旗下の士なりしが。頗る草雙紙の戯作に長じて。著書あまたが中に。偐紫田舍源氏といふを數篇綴れり。是は源氏物語を翻案し。潤飾したるものにて。普く世にもてはやされしが。聊か忌諱に觸るゝ所ありて。天保十三年六月。彼草子は絶版を命ぜられ。作者種彦の彦四郎も。其頭永井五右衛門方に召され。中渡されしは。汝高屋彦四郎方に。柳亭種彦と云ふ者差置候由。右之者戯作致候事不宜候間。早々他へ遣し相止めさせ申可し云々と申渡されき。同時爲永春水も。人情本を作り罪を得て。手鎖に處せられ。(此事は人情本の所に演ぶべし)小說家ならねど寺門靜軒も。江戸繁昌記。北里歌評等の著に據りて。武家奉公構を申付られさるに。種彦獨り其罪を免

かれさるは。特別の計らひに依るといふ。此田舍源氏。世に賞翫せられしからに。遂に源氏鮨。源氏煎餅。源氏蕎麥等。源氏の名を冠らするもの多く出來ぬ。亦以て當時の嗜好に適ひしを知るべし。此草子より後。草雙紙版木の彫刻も細微に。表紙繪の彩色も善美を盡して錦繪の如くなり。白縫物語。時代加賀見など。數十篇を重ねて。大尾に至らざる程の。大部をも出すに至れり。

草雙紙の文（山東京傳作。絞染五郎强勢談の發端）

長祿年中。東山義政公の時代の事とかや。東海道なるみの宿に。絞染屋四郎助といふ者ありけり。生れつき正直なる者にて。もとは鎌倉に武家奉公して居たるが。其後此所へ引込み。絞染屋へ聟入して。一人の男子を設け。其名を四郎太郎と云ひけるが。生れつき大力なる上。自からも大山石尊大權現。不動明王。大天狗。小天狗に祈りて。力を授かりければ。其力量いか程といふ限りを知らず。さて四郎太郎十四五歳より。大酒を好み。やゝもすれば人を打ちたゝき抔して。度〳〵村を騷がしける故。せん方なく五年あと。十七歳のとき勘當して。行くへ知れずなりにけり。其後また一人の女の子を設け。妻は産後にはかなくなり。うばを抱ゆる力もなければ。四郎助男の手一つにて。人に乳を貰ひ。或ひはすりこ抔して。やう〳〵とうだてあげ。其名を小よしと付けて。ことし四才に生れつきいと美くしく。愛らしき盛りなれば。蝶よ花よとめで慈しみ。手の内の玉の如くに思ひて。養ひ育てけり。

扨小よしある日の夕暮門口に遊び居たるが。ふと見えずなりける故。村中の騒ぎとなり。里人云ひ合せて。五人七人つゝ手分けをなし。かね太鼓を打ならし。迷ひ子の小よし〳〵と呼びわめきて。五里七里。ないし十里が間の。野山の末までも。あまねく尋ね。凡そ七日ばかりも探しけれども。一向に知れず。若しは狐狸に迷はされしか。又は荒鷲などにとられしか。さもなくば天狗どのにつまゝれたで御座らう。あゝ生れつきもよい子で。年にも似合はぬ利口者であつたもの。惜しいをさをやつたといへば。うれ〳〵。こんぢうもれらがかゝしが。追分の饅頭を土産に買つて來てやつたなら。いたゞいて直には食はず。父さんに見せて。たべやんすといふたげな。行儀のよい子であつたぞへ。さればいの。村中に子供も多いが。小よしほどかあいがられさ子。も又とない。ふたがのう四郎助どの。これも前世の約束でとゝあきらめて。失せた日をめい日に。あとをとむらうてやらしやれと芋川の畑作。さかい橋の五郎又後家。さか寺のぐわんしんぼう。あふぎ川のかなめ婆など。口〳〵に悔みいうて。涙をこぼすぞ頼もしき。さて四郎助が悲しさは。何に譬へん方もなく。小よしがもち遊びの張りこの達磨。風車を見るに付け。之を持て門口に機嫌よく遊んで居さもの。をどうして迷子に成りをつさ。ひもじくあらう泣きをらうと。子故の闇のぐちなを。口説たてたる男泣き。毎晩抱いてねかしつけたる時刻になれば。小豆枕や一つ

みの。疂間着のきものが目につきて。いとゞ猶胸もはりさく思ひにて。あゝ惣領四郎太郎は勘當し。たま〳〵まうけた小よしめは。見えなくなり。よく〳〵子供に緣なき者。草葉の蔭の女房にも。云ひわけなしとくやみ泣き。涙に袖をぞぼり染め。失せた其日をめい日と定め。若し生きてなら現世の祈禱。もし死でなら菩提のためと。形見にのこる手遊びを。持佛の前にうなへつゝ。佛事供養を營みぬ。これ此草子の發端なり。

（草雙紙は小童兒女にも解し易きを主とし平假名のみにて俗談平話を用ひき然れども後にはやゝ高尚なる文體をも用ふるに至れり）

（七）滑稽本

草雙紙に滑稽を盡しゝは。安永四年（百十五年前）戀川春町（通稱倉橋壽平。駿州小島の藩士なり）の金銀先生榮花の夢。及び翌年出版の高慢齋行脚日記などいふ書噺矢なりとかや。此頃平賀源内も滑稽本の著數多あり。何れも滿腔の不平を戲作に寓せしものなれども。後世の滑稽本は。全く其著根なし艸の類を。小形になしゝものなるべし。下りて寛政の頃（百年程前）十返舍一九の膝栗毛。式亭三馬の著書など大に行はれき。此二人は草雙紙にも數多の作あれど。最も滑稽に長じたり。此後に至り鯉丈金鶩の徒出でゝ。八笑人。和合人。七變人などいふ書を著し。隨分世にもてはやされしが。一九三馬の作には遠く及はず。中にも式亭三馬の滑稽洒落。筆致の輕妙なるには。何人も及ばざる所あり。抑一九の膝栗毛世に出るや。製本間に合はぬばかり。購讀者夥しく。眞に洛陽の紙價。これが爲に貴しといふ程の。流行なりし由なるが。彼書は滑稽の極

猥褻卑陋の言多し。三馬の作も當世下界の人情を穿ちさるものなれば。卑俗の語なきにあらねど。浮世風呂。浮世床。古今百馬鹿。四十八癖。人心覗機關の如き。いづれも世人が常にな す程の。破綻失策を探りて。自然と讀者の頤を解けり。鯉丈金鵝の著ゝ至ては。殊更に奇異なる趣向を構へ。言詞も卑俚の極に達せり。

滑稽本(式亭三馬作浮世床)の文

汕でにしめたやうなる。太織の綿入。あいびろうどの紋付。すそからぼろをさげて。なぎなたなりのざうりをはき。あたまはさかやぎぼう〳〵。ひげむしやくしやとして。じゝむさき事いはんかたなし。うのくせに氣象たかく。辯舌滔々として高慢を吐くは。素讀指南の先生。社盟をかきわつめて。やうやく五六輩に過ぎざる貧書生と見えたり。△殘念閔子騫といふ古風なる口癖あり。生國はいづれ片田舎の者。遊學「どうだ主の間孔糞四五年になれど。江戸のことはむちや也。

人夙に起き夜に寐てかせぐものだの。ぴん「ヤこれは先生さん。お早うでございます。先生といふてはなめげにきこゆるとて。先生さんの樣をつけていふ也孔「たれは清貧を樂む氣だから。早く起る氣もないが。家鹿の爲に起されさ。ヤあたけて〳〵どうもならぬ。ぴん「嘉六が酒にでも醉て來やしさか。孔「此男は何をいふ。鼠が酒に醉てさまるものかハヽヽ。ぴん「へェ。わつちは又。筋向の嘉六が例の生醉であたけさかと思ひやしさ。孔「何さ。家鹿といへ鼠の異名さ。ぴん「へェ。鼠にも表德がでせへすか。孔「表德かはしからぬが。社君だの。家鹿だのと種々異名があるて。うばから。こめ「左官だの壁だのとつけるも尤だ。あいつが壁へ穴を明ちやァ。左官さわぎだ。ぴん「べらぼうめ。だまつて居ろ。こめ「アイトヘこんで門口を孔「獨居していると。鼠までが馬鹿に仕をる。一屋無猫老鼠走白晝

と。左傳にもある通り。れれを侮てどうもならぬ。王肅が逐鼠丸でも欲いものだテ。[とめ]逐鼠丸とは京傳の本に書てありやす。直さま買へやすはな。[びん]馬鹿アいへあれは讀書丸だは。[とめ]ホンニろうだけ。[孔]ドリヤ一ツ剃てもらもうかトこし高のたらいへ。湯をくび[びん]コレ留。モット敷居の脇を能く掃エ。いけぞんせへなべらぼうだ。いくら云ても掃落しやアがる。[とめ]アイ[孔]箒千里惟留が掃さる所なりだ。アハヽヽ。留ハ奥を潤し床は身を潤すと云ふから。髪結床の隙にも奥の用をさして。水でも汲がいヽ、[とめ]きついれせ話さ、閔子騫めエ[孔]ナンダ閔子騫だ、ア黄白には富たいものだナ、汝が們まで己を安じをる、ハテ殘念閔子騫[とめ]ナットまづ一ツ閔子騫[三人]ハヽヽ[孔]冀毛受をもつて腰をかくる。[びん]五郎は髪をとかす孔はむかうの壁に張り付けある。寄席のびらを見つめてゐたりしが。ハヽアハテおつな事があるの、漢にも賈竹本祖太夫鶴澤蟻鳳。ハテ太夫などヽいふも有たれど、日本には奇しい。尤秦の始皇帝が松に太夫官をば與さが、竹ヨ祖太夫の官をやつた古事も覺ずと。扨又鶴澤と置て蟻鳳と對を取つた心はどういふ意であろうナ、コレ主人。あの書たものは何にするのだの。[びん]どれエ[孔]あれトゆさす[びん]あれは坐敷淨瑠璃さ。祖太夫に蟻鳳だから夕も三百ばかり這入やした。[孔]フムトいへども根からわからずハテナ。れれは俗事に疎いからとんと解せぬ。又こちら見て今昔物語ト。何だ朝寐房夢羅久。フウ。トかんがへ林屋正藏。ハテナ。風流八人藝。はヽア。これは所謂季氏が八佾のさぐひと見えるナ。此季氏も魯國の。

太夫だて。俗は舞列也。天子は八ッ。諸侯は六ッ。太夫四ッ。士は二ッ。俗する毎に人數其俗數の如し。びん「モシ」〜夫は何の數でざりやすエ。孔「是は八俗と云て舞の數だ」びん「わ」つちは又。おつに氣どりやしさアハヽヽ。あれはうんな六かしい物ぢやアでざりません。八人藝と云て一人で八人の藝をする盲人さ。（以上浮世床）

（八）浮世草子

浮世草子とは。井原西鶴を始め。八文字舍自笑等のかける書。即ち世に西鶴もの。八文字舍本などいふ書を總べて。假に命名せし所なり。西鶴は難波の俳諧師にて。始め一段の淨瑠璃をも書けり（し由。前にもいへり）。天和貞享の頃（二百十年程前）にや。戯作の草子あまた著はせり。其書は男色大鑑。西鶴織留。世間胸算用。一目玉梓。日本永代藏西鶴彼岸櫻。風流盛衰記。三代男。一代女等。此他猶多かり。いづれも專ら遊廓のよしなし事をのみ綴りて。頗る猥雜なりしからに。後世識者の譏りを免かれず。されども其書は。世態人情を寫し。言語衣服のさまに至る迄。目前に見聞く所を述べされば。今にして當時の風俗を考證するには。好資料なり。元祿年間に至りては。箕山が大鑑。兩巴尼言。鷺水が丹前艶男。其角が五十四君。團水が新永代藏の類。俳師ならでも。鈴木昌三。淺井了意。錦文流の徒。皆西鶴の流を汲めり。但し其文は唯。物を賦するに止りて。一部の趣向なし。自笑。其碩等に至り。西鶴が筆意に倣ひ。一部の趣向を立てゝさるもあれど。猶浮艶鄙俚なるが多し。

西鶴の文（日本永代藏「標題」昔は掛算今は當座銀

（江戸にかくれなき出見世壹寸四方も商賣の種）

古代にかはつて人の風俗次第奢になつて。諸事其分際よりは花麗を好み。殊に妻子の衣服。まゝ上もなき事共身の程をらず。冥加たろしき高家貴人の御衣さへ。京織羽二重の外はなりき。殊さら黑き物に定まつての五所紋。大名より末〳〵の万人に此似合むさると云事なし。近年小さゝしき都人の仕出し男女の衣類品〳〵の美を盡し。雜形に色を寫し浮世小紋の模樣。御所の百色染解捨の洗鹿子。物好各別世界にいさりせんさく。女の身持娘の緣組より內證うすくなつて。家業の障となる人數をらず。嬉似の平生きよらを見するは渡世のためなり。万民の美婦は春の花見秋の紅葉見婚禮振舞の外は目立衣裝を着重ず共すむ事なり。ある時室町のゝた脇に仕立物屋の軒かはりて。橘の暖簾掛りて。當世着物乃縫出しすぐれて都の手利ありて。絹綿爰に持つどひてさながら衣掛山を我宿に見し事ぞかし、仕付の糸火熨あつるを待兼しほと〳〵ぎす。初空卯月一日は衣替とて色よき袷を縫かけしを見るに、白き紋羅のひつかへしに。緋縮緬を中に入て三枚重ねの袷。兩袖襟に引綿むかしもなかりし事なり。此うへは万の唐織を常住着となすべし。此時節の衣裝法度諸國諸人の身のため今思ひあたりて有難く覺えぬ。商人のよき絹きたるも見苦し。紬はおのれにうなはりて見よげなり。武士は綺羅を本としてつとむる身なれば。たとへ無僕のさぶらひ

までも。風儀常にしてたもはしからず。近代江戸靜にして松はかはらず常盤ばし。本町吳服所京の出見世紋付鑑にあらはし。棚もり手代うれ〳〵に得意の御屋敷出入ともかせぎに勵みあひ。商買に油斷なく辨舌手だれ智惠才覺、算用たけてわる銀をつかまず。利德に生牛の目をもくじり、虎の御門の夜をこめ。千里にゆくも奉公。朝には星をかつぎ秤竿に心玉をなして。明暮御機嫌とれども。以前とちがひ今繁昌の武藏野なれ共。隅から角まで手入して。更に小つかみ取もなかりき。御祝言又は衣配の折からは。其役人小納戸かさの好みにて一商して取けるに。今時は諸方の入札すこしの利潤を見掛て食ひ詰になりて。內證かなしく外聞斗りの御用等調へ。剩へ大分の賣かゝり數年不埒になりて。京銀の利まはしにも合はず。かはし銀につまりて。難儀俄に取ひろげたる棚も仕舞がたく自から小前になりぬ。兎角はあはぬ算用江戸棚殘て何百貫目の損足もとのあかい內に本紅の色かへてと。銘々分別する時。又商の道はあるもの。三井九郎右衛門といふ男。手金の光り昔小判の駿河町と云所に。面九間ゟ四十間に棟高く長屋造りして。新棚を出し。萬現銀賣にかけ直なしと相定め。四十余人利發手代を追廻し。一人一色の役目。さとへば金襴類一人。日野郡內絹類一人。羽二重一人。沙綾類一人。紅類一人。麻袴類一人。毛織類一人。此如く手わけをして。天鳶絨一寸四方。段子毛貫袋になる程。緋繻子鎧印長。龍門の袖覆輪かさ

〳〵にても物の自由に賣渡しぬ。殊更俄か目見の熨斗目急きの羽織などは。其使をまたせ數十人の手前細工人立ならび。卽座に仕立これを渡しぬ。さによつて家榮え。毎日金子百五十両つゝならしに商賣をけるとなり。世の重寶是ぞかし。此亭主を見るに。目鼻手足あつて外の人にかはつた所もなく。家職にかはつてかしこし。大商人の手本なるべし。いろは付の引出しに。唐國和朝の絹布をさゝみ。品々の時代絹。中將姫の手織の蚊屋。人丸の明石縮。阿彌陀の涎かけ。朝比奈が舞鶴の切。達磨大師の敷蒲團。林和靖か括頭巾。三條小鍛冶か刀袋。何によらずないといふ物なし。萬有帳めでさし。

（西鶴の草子は大かた猥褻の文辭多し今心してさらぬをとれり）

（九）小本

小本は浮世草子より出でゝ。遊里洞房の癡情を寫し。嫖客のたはれ言などに。滑稽を盡しゝ小册子なり。一に洒落本とも。又菎蒻本とも稱せり。これは明和年中に開板せし。遊子放言といふ書を嚆矢とす。

按ずるに平秩東作の莘夜茗談にも。丹波屋利兵衛と云者浮世師といふものゝ事を綴りて。遊子方言と題して須原屋市兵衛方へ遣しけるを。板行して大に行はれたり。是より唐本表紙の小册行はれ。廓中掃除。又辰巳の園などゝて。數十部出でゝより。大本は廢れたりとあり。浮世師とは。今俗に通人とか粹客とかいふ者の事にや。

安永の頃（百十數年前）蓬萊山人歸橋。唐來三和。などいふ輩。競

ひて小本を作りしかど。大に行はれしとは聞えず、然るに安永七年(百十一年前)田螺金魚と戯名する者(傳ならず神田に住める町醫師の子なりとぞ)傾城買虎の卷といふ小本を作り。續きて吉田の錦江。振鷺亭。などいふ洒落本の作者いで、。世にもてはやされしより。山東庵京傳も。又彼等の虚名を羨み。天明より寛政の始め頃。吉原楊枝。夕の口舌。辰巳の園。息子部屋。おげ〳〵千話。傾城買四十八手など。續々數種を著はし、が。世人雅俗となく賞翫せざるはなし。此前後に。餘人の作も多かりけれど。京傳の著。拔群なりといふ世評ありき。さて洒落本の趣向は。凡べて猥雜にして風俗を紊すの虞あるを以て。遂に嚴禁の官令あり。且草雙紙といふとも。博徒及び遊閭嫖客の趣きをかきあらはす事をゆるされず。然るに書肆蔦屋重三郎。窃に京傳に勸めて二種の洒落本を作らしめ。表題に教訓讀本と題して發兌せり。書中の人物は。姓名を鎌倉時代に擬しけれども。其實は錦の裏。仕掛文庫といふ例の洒落本にして。猶洞房の記事なりけり。此書も又大に行はれしが。遂に官に聞えて。寛政三年の夏。京傳。重三郎とも召捕られ。吟味の後。彼等利慾に迷ひ。法度を忘却せし不束の罪によりて。作者京傳は手鎖五十日。版元重三郎は身上半減の闕所仰付られたりき。是より京傳は謹愼第一の人となり。暫しゝ戯作の筆硯に親まざりしが。翌年の冬。實語教稚講釋。龍宮鱈鉢の木。などいふ教訓を主とし。昔話しを翻案せし草雙紙を著し。其後讀本をも述作するに至れり。

因に云。當時の小説家は。著作料を得たる事なし。是あるは

京傳に始る。寛政三年娼妓絹籭といふ洒落本を作り。版元蔦屋より潤筆料として金壹両を得たりとなん。伊波傳毛の記に云はく。戯作者は風來山人及び喜三二春町等。世に行われたれども著述の潤筆を得たる事はなかりき。早春其作者へも板元の書肆より錦繪草册子なんど多く贈り、亦當り作ありて。夥賣れたる時は。其板元一夕作者を遊里へ請待して。多少の饗應をするのみなりき。寛政中。京傳馬琴が作の草册子いたく行るゝに及びて。書肆耕書堂仙鶴堂相謀りて。始めて兩作の潤筆を定め。京傳馬琴之を許す事六七年。爾後ます〳〵行れて。其潤筆も漸々に登りにき。皆是書肆が定むる所に從ふのみ。後に出來つる戯作者は。例を推して濡筆を得るもあれど。能く京傳馬琴が濡筆に及ぶ者ある事なし」といへるをも思ひ合すべし。

(十)讀本

讀本は遠く演義の史より傳統せる。實錄體の書と。院本とを併せて。更に一變したるものなり。既に喜多村節信の筆記に。讀本といふものをかしき文章にて。ぬめりたる所も淨瑠璃に類し。古語の見ゆるも。もと涼岱が西山物語を手本とせたる也。ふつゝかなる横ぐいへといへる類ひのこと多し云々とあり。西山物語も明和五年建部綾足が著はしゝ所なり。同十年吉野物語(一名本朝水滸傳)といふをも著しゝが。共に中古の物語文を本として。雅文古言に物したり。後に北川眞顔が月宵鄙物語。石川雅望が飛彈匠物語。村田春海が竺志船物語等。いづれも古雅の詞を以て綴りたり。是等ゝ唯擬古のす

さびにして。畢竟學者の好事に過ぎず。又安永五年開版の雨月物語い。京師なる上田秋成の戯作にて。唯怪談を集めしのみなれども。文體は全く京傳馬琴等の。據る所とぞなりけらし。

寛政の始め。洒落本の發行禁制ありてより。山東庵京傳も又讀本を著せり。此人もとより意匠に富み。文才あるからに。是はた世人の賞賛を得たり。其重なるは忠臣水滸傳。優曇花物語。うたふ安方忠義傳。稻妻標紙。本朝醉菩提。安積沼。雙蝶記の類。此餘幾ばくもあるべし。同じ頃東海道日阪驛に。栗枝亭鬼卵といふ人あり。讀本の類あまたを著しゝが。さしたる傑作もなかりしはや。稍後に。江戸に高井蘭山。感和亭鬼武といふ兩士ありき。蘭山も古史の演義。または讀本のみを著して。草雙紙の述作なし。享和三年三國妖婦傳を著し。文化三年に至る迄。年々發行して數卷を重ねつ。此外孝子嫩物語。星月夜顯晦錄等。皆蘭山の著なり。鬼武の著には。自來也物語あり。(兒來也豪傑譚といふ。草雙紙とは別なり)。此書大に流行して。文化四年大阪にて。演劇にも仕組たりとぞ。

さて高名なる曲亭馬琴はもと京傳の門人なりしが。出藍の譽ありて。讀本の作に於ては。自ら一體を創し。學識意匠趣向文藻。共に前後に此人の如きもなかるべし。最も世人の愛讀するは。里見八犬傳。椿說弓張月。朝夷巡島記を始め。俠客傳。美少年錄など今に至るまで行いるめり。此外五册十册の讀本にも。勝れて興ある者多かり。總じて此翁の著。刊行の書のみにても二百九十余種ありといふ。

式亭三馬。十返舍一九。柳亭種彦。小枝繁なども又讀本の著作あれど。皆馬琴の作に壓倒せられて稱せられず。況んやさまでなき。小說家輩に於てをや。

讀本の文(曲亭馬琴作八犬傳芳流閣の條)

古の人云いずや。禍福い糾ふ纏の如し。人間萬事往として。塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る處。將禍の伏する所。彼にあれは是にあり。とは思へども豫てより。誰かよくうの極めを知らん。憐むべし犬塚信乃は。親の遺言紀の名刀。心に占つ身に傳つ。艱苦の中に年を經て。得がたき時を得てしかば。遙々滸我へ齎して。名を揚家を興すべかりし。其福は禍と。ふり替りたる村雨の刃い舊の物ならで。我身を劈く讐とぞなりし。憾を爰に釋よしもなく。緯急にして意外にあり。僅に當座の辱めを。避はやと思ふばかりに。夥の圍を切開きて。芳流閣の屋の上より。攀登れども左右に。脱去べき道のなければ。其處に必死を極めたる心の中は何如なりけん。想像だにいと痛ましされば又。犬飼現八信道は。犯せる罪のあらずして。月來獄舍に繫れし。禍は今恩赦の福。我縛めの索解けて。人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて。怒に擇み出されつ。他の憂を身の面目に。今更用ひられん事。願はしらずと思へども。推辭て許さるべくもあらぬ。君命重く彌高き。彼樓閣は三層なり。其二層なる檐の上まで。身を霞ませて。登りて見れば。足下遠く雲近く。照る日烈しく堪がたき。頃は六月廿一日。きのふも今日も乾

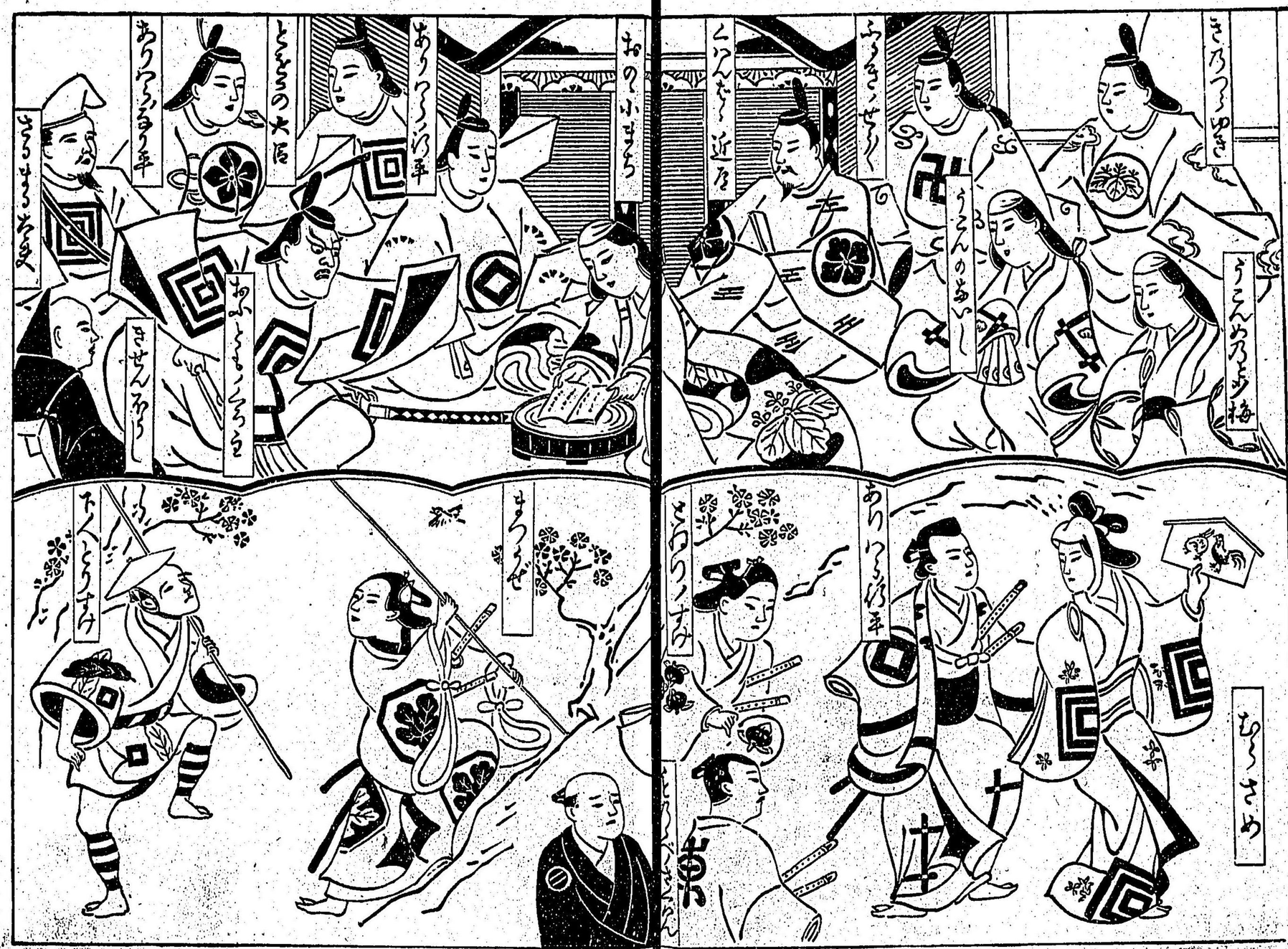
蒸の酸熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て。下には大河滔々たる。こゝ生死の海に朝る。洄溯は名にたふ坂東太郎。水際の小舟楫を絶て。進退既に谷まりし。敵にしあれはいかでわれ。繋留んと颺の。樹傳ふ如くさらゝと。登果たる三層の。屋背には目柴翳よしもなく。迭に透を窮ひつゝ。疾視あふて立たる形勢。浮圖の上なる鶴の巣を、巨蛇の寵ふに似たりけり。廣庭にゝ成氏朝臣。横堀史在村等の。老黨若黨圍繞せし。床几に尻を打掛て。勝負怎生と向上たる。亦只閣の東西には。身甲ゑる許多の士卒。槍長刀を晃らし。或ゝ箭を負ひ弓杖突立。組て落なは擊留んとて。頂を反して之を觀る。加旃外面ゝ。緜連として杳なる。河水遶りて砌を浸せば。借使信乃。武事たけ膂力衰へず。能く現八に摟得るとも。墨氏が飛鳶を借されゝ。虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ。地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入りぬ。獣ならずも狩場に在り。三寸息絶めれば絆みな休ん。脱れ果じと見えたりける。當下信乃の思ふ樣。初層二層の屋の上まで。追登らんとせし兵等を。斫落しつる後は。絶て近づく者なきに。今只獨り登り來ぬるは。世に覺えある力士ならん。這奴は是れ。膳臣巴提使が。虎を暴にする勇ある歟。又富田三郎が。鹿角を裂く力ある歟。遮莫一個の敵なり。引組て刺迭へ。死するに難き事やとある。能き敵にこそでさんなれ。目に物見せんと血刀を。袴の稜もて推拭ひ。高瀬の如き方桿に。立たる儘に寄するを俟て

は。見八も亦思ふ樣。彼犬塚か武藝勇悍。素より萬夫無當の敵なり。然れども搦め兼て。他の援を借る事あらば。獄舍の中より此役義に。擇出されし甲斐もなし。捕捕るとも擊るゝとも。勝負を一時に決せんものと。思ひよければ些も擬議せず。御錠ざふと呼かけて。拿さる十手を閃かし。飛が如くに方桙の。左の方より進登りて。組んとすれども寄つけず。心得たりと鋭太刀風に。擊を發石と受留て。拂へば透さず數刀尖を。拄て流す一上一下。辷る蠹を蹈駐て。頻りに進む捕手の秘術。彼方も劣らぬ手煉の働き。炭より落す太刀筋を。あちこち外す虛々實々。未だ勝負を判ざれば。廣庭なる主從士卒は。手に汗握らざるもなく。瞬もせず氣を籠めて。見るめもいとゞ迫なる。去る程に犬塚信乃は。侮り難き見八が。武藝に敵を得たりけりと。思へば勇氣彌增て。刀尖より火出るまで。寄ては返す太刀音。被擊。兩虎深山に挑む時。錚然として風發り。二龍青潭に入る時。沛然として雲起るも。かくぞあるべき春ならば。峰の霞か夏ならば。夕の虹歟と見る可りなる。いと高閣の棟にして。死を爭ひし爲休。世に未曾有の晴業なれば。見八は被籠の鑠。肱當の端を裏欽く迄に。切裂れしかど太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで。初めに淺痍を負ひしより。漸々に疼を覺れども。足塲を揣て撓まず去らず。疊かけて擊太刀を。見八右手に受流して。返す拳につけ入つゝ。ヤッと被たる聲と共に。眉間を望て礮と打。十手を丁と受留る。信乃が刃は鍔際より。折れて遙

に飛び失せつ。見八得たりと無手と組むを。うがまゝ右手に引着て。迭に利腕楚と拿り。捩倒さんと曳聲合して揉つ扱るゝ力足。此彼齊一蹈辷らして。河邊の方へ滾々と。身を輾ばせし覆車の米苞。坂より落すに異ならず。高低際しき棧閣に。削成たる甍の勢ひ。止るべくもあらざめれど。迭に拿たる拳を緩めず。幾十尋なる屋の上より末遙なる河水の。底にいらで程もよし。水際に繫ける小舟の中へ。打累りつゝ撞と落れば。傾く舷と立浪に。変と音も水烟。纜丁と張。斷て。射る矢の如き早河の。直中へ吐出されつ。爾も追風と虚潮に。誘ふ水なる泅舟。往方もおらず成にけり。（以上八犬傳）

（十一）演劇脚本

元禄十ハ年脚本のさし画



演劇脚本は。演戯の發達と共に尙し。然れども。之を刊行せしは後世の事なり。元祿の頃。大名題。小名題。役附等を詳記し。繪をさへ入て發行あたる物あれども。大かさ淨瑠理正本。或は筋書といふ物に似て。彼の造り物。鳴り物。衣裝の拵へ拵いふを始め。俳優の出這入。トガキ。思入等の事と記さず。

卷首に造り物鳴り物を次第し。終りを柏子幕ととぢめて。中に床の淨瑠理。渉り臺詞等をつらね。總べて脚本のまゝを刊行せしは。文政の頃。(今より七十年程前)なりきと覺ゆ。(上方にては此前よりありきと覺ゆれど。今思ひいでず)當時鶴屋南北といふ狂言作者種々の演劇を仕組みし中に。文政八年の秋。東海道四谷怪談といふを新作し。中村座に於て興行せしに頗る世評よかりしかば。頓て。脚本のまゝを刊行せり。然る

に。彼戯曲こそ。後にも度々興行して。常に世評よかりしか。正本はさまで行はれずして止みぬ。此後二三の正本を。開版する者もありしが。いづれも流行せざりしかば。遂には演劇の筋を。草雙紙の體に物する事となれり。

（十二）正本製

正本仕立といふ草子は。文政の始め初代柳亭種彦の創意になれり。これは草雙紙と正本（即ち演劇脚本）とを折衷し。尤も繪事に注意して。篇中の人物を。當時の俳優に擬し。大小道具衣裝の風に至る迄。舞臺の樣をさながらに描き。言詞も臺詞の體に作爲せり。故に之を正本製と稱す。珍らしくも興あるからに。眞の正本より勝りて行はれ。年々新作の發行ありしが。種彦歿後は。僅に門人四方梅彦等の著述を見るのみ。それも今は廢れたり。

（十三）人情本

人情本は。洒落本より出でゝ草雙紙の如く續き物となりたる迄なり。洒落本は上にも演べし如く。寛政三年悉く絶版を命ぜられ。爾來新作する事をも禁せられしを。東里山人いつしか。籬の花。契情肝粒志。などいふ書を著はし。やゝ浮艶の事を述べしが。これ人情本の始めなり。後に爲永春水もこれに倣ひ。專ら人情を寫し。婦女勸善のさめと號し。種々淫奔なる物語を作りし中に。梅暦。辰巳の園。英對談語。の如きは最も甚しかりしかば。天保十三年の夏公儀の咎めを蒙り。遊所放蕩の體を畫入に仕組みし事。不束の至りとて。手鎖申付られ。謹慎中に病歿せり。此前後。人情本の作者多く出でたりしが。いづれ

も遙に春水には劣りたり。

沿革總說

以上演べし所を。更に一括をして云はゞ。上代人文未開の頃には。唯奇怪なる巷談街話のみなりしが。延曆遷都以後。公家世盛りの間は。文學の進歩と共に。小說も又大に進み。假字文の物語盛に出來ぬ。而して當時の小說は。作者も讀者も大かた縉紳貴族にて。專ら高閣深宮の間に行はれき。保元平治の亂後。武家執政の頃には。干戈屢々動き。文運漸く衰へて。小說も又廢れたり。但士太夫以上には繪卷物を弄ぶ事始まり。俗間は首尾不完なる。尙武的巷談の世界となり。室町將軍の時代迄も。さながら續きしが。同時代には別に謠曲といふものの興れり。是はた一種の小說なるを。緩急高下の節譜を作り。樂器にあはせて奏せしのみ。作者は大かた僧侶なりしも。當時大亂の餘。上下文字なく。筆硯に親しむは。蓋彼の徒なりし故ぞかし。此頃より淨瑠璃といふものの行はれしが。是も猶謠曲の類ひにて。始めは三絃に合する事もなく。たゞ扇拍子にて諷ひきといふ。

德川時代の始め。物語は絕えしが。猶一段切の淨瑠璃。金平本の類行はれ。(謠曲は足利氏の故例の如く。武家の式樂となりければ。民間には行はれず。)又御伽話しの草子もありき。元祿の頃にも。和漢の學を。始め。さらぬ小藝末技に至るまで。大に發達しければ。小說も又從ひて盛りになりぬ。先づ一段淨瑠璃は。進みて五段續きとなり。次第に人情に近き趣向を構へ。必ず首尾を完うする事となれり。又御伽草子も金平本と和

して。草雙紙合卷となり。之を赤本といへり。其後黑本と變じ又青本と改まりし迄は。猶兒童に示す敎訓なりしが。黃表紙と稱する頃より專ら洒落を交へ。滑稽を盡す事流行して。遂に大人の見るものと定りたりき。

元祿の頃。特に行はれしは。浪花の西鶴自笑等が浮世草子なりけり。其餘波江戸に流れ來て。明和の頃洒落本出でたり。是れ頗る猥褻なるから。遂に禁制の令下り。著作者罪科を蒙れり。是より先。實錄といふ一體行はれ。寬政の頃よりは讀本といふものの盛になりぬ。此外演劇脚本。正本製。人情本の類もありしが。其種類傳統は上に圖したり。而して元祿以降の作者即ち物の本書きを數ふれば。金ぴら本の作者に。岡淸兵衛。四野宮彌四郎。北條宮內。塚原市左衛門等を始めとして。淨瑠璃院本作者あり。近松門左衛門。竹田出雲。並木宗輔。紀海音。長谷川千四。三好松洛。文耕堂。錦文流。並木千柳。西澤一鳳。安田蛙文。吉田冠子。竹本三郎兵衛。近松半二。爲永太郎兵衛。竹田小出雲。並木丈助。春艸堂。菅專助。近松東南。淺田一鳥。中村阿契。若竹笛躬。並木良介。同素柳。村上嘉助。豐竹應律。豐岡珍平。浪岡橘平。同鯨兒。同蟹藏。中村阿笑。豐田正藏。梁塵軒。難波三藏。黑藏主。二步堂。淺田可啓。中村潤助。八民平七。榮善平。北窓後一。笛田因幡。竹田平七。同外記。同瀧彦。同正藏。小川半平。近松京經。笛田伊豆。並木和輔。竹土丸。福松藤助。竹田文吉。北脇素文。一來堂。寺田兵藏。松田戈二。竹田新四郎。近松能輔。松田はく。春木元輔。湖水軒。但馬仙鶴。安田安蛙。戸田吾文。松岡千助。戸川不鱗。但馬彌四郎。司馬芝叟。千葉軒。豐春助。中村魚眼。近松やなぎ。福內鬼外。立川

馬場紀上太郎。筒井半二。松貫四。玉泉堂。源平藤橘。達田辨二。吉田鬼眼。一二三軒。三樂坊。樹下石上。双木千竹。山田案山子。鳥亭馬場等あり

演劇作者のうち。古く俳優にして作者を兼たるは。元祖市川團十郎。姉川新四郎。市川助五郎。元祖中村七三郎。松鳥兵太郎。藤川半三郎。市山卜平。辰岡久菊。中山來助。尾上新七等あり。又津打治兵衛。樋口半左衛門。藤本斗文。壕越菜陽。金井三笑。奈河龜助。中村重助。辰岡万作。並木正三。並木五瓶。村瀬源三郎。玉松小三郎。江田彌市。津打半左衛門。竹鳥甚助。鈍津與惣兵衛。村山十平治。中村清五郎。津打九平治。同五左衛門。中村清三郎。早川傳四郎。並木良助。津打菅祈。中村太郎左衛門。中村傳七。奈河晴助。門田侯兵衛。增山金八。常盤其堂。眞野馬胡。近松德三。奈河篤輔。奈河七五三輔。鶴屋南北。櫻田治助。寶田壽來。瀨川如皐。河竹新七。三升屋二三治。松島てうふ。福森喜宇助等ありき。

又浮世草子の作者には。西鶴。箕山。鷺水。團水。立圃を始め。鈴木昌三。淺井了意。錦文流。安藤自笑。江島其碩。南嶺子の徒名高く丈阿。和祥。文子。通幸等は。草雙紙を書き始めつ。

明和安永の頃より。維新の折に至る迄。諸種の草子に著名したるは。明誠堂喜三二。戀川春町。市場通笑。唐來三和。風來山人。森羅萬象。蓬萊山人。四方山人。朱樂菅江。六樹園。北川眞顏。桃栗山人。芍樂亭長根。窪田俊滿。柳川桂子。米山鼎。我川柳榮。深川錦鱗。鈴木吉路。芳川友幸。物愚齋於連。蘭德齋。墨蝶亭可立。文溪堂。臍下邊人。四國子。常盤松。四方屋本太郎。王子風車。松泉堂。少振堂。一竹達竹。清水燕十。古風。豐里舟。艶美。奈蒔野馬鹿人。里山。蝸

牛房屯卜。二本坊霍志藝。幾智茂內。紀定丸。常丸。無中點。竹杖爲輕。飛田琴太。錄山人信鮒。二水山人。芝全交。振鷺亭。南仙笑楚滿人。栗枝亭鬼卵。合浦兎月。優々館。柳浪。文麿。感和亭鬼武。高井蘭山。小枝繁。夢中夢助。鳴瀧。山東鷄吉。薜羅館。喜魚芳。白雪紅。白山人。榎雨露住。虛空山人。七珍万寶。万龜。万倍。万理。甲龜。三陀羅法師。山東唐州。新好。千差万別。物蒙堂石山。傳樂山人。美足齋象睡。錦森堂軒東。浮世伊之助。錄山人信普。清遊軒。一瓢齋勝圓。時烏舘。夜道久良記。秋收冬藏。荒金土成。信夫道彦。見得坊。梅散人。鹿杖山人。發田芋助。巴扇堂。春道草樹。築地善好。本膳亭坪平。芝山人。虛呂利。寶倉主。望月窓。秋輔。樂山人馬笑。橘香保留。榮邑亭。邑二。九年坊。時太郎可候。虛呂利館美明。松亭竹馬。島田金谷。德永素秋。楓亭猶錦。面德齋夫成。待名齋一世。素連齋東紫。二代目春町。戀川行町。二代目万象。櫻川杜芳。同慈悲成。竹塚東子。神屋蓬州。東里山人。紫色主。祭和樽。全亭正直。西來居未佛。關亭傳笑。花笠文京。林屋林泉。瀧亭鯉丈。楊春亭慶賀。江南亭唐立。玉樓花紫。忍岡常丸。美圖垣笑顏。一筆庵英泉。岳亭丘山。松亭金水。梅亭金鶴。二代目馬。黑川亭雪麿。山東庵京山。乾坤坊良齋。笠亭仙果萬亭應賀等。此他一わたり知られたるは猶多くるべし。中にも例の。山東庵京傳。曲亭馬琴。十返舍一九。式亭三馬。柳亭種彦爲永春水の六人を。當時稗史の六大家と稱せり。曲亭門人に櫟亭琴魚。嶺松亭琴我。直亭驥德。琴梧規矩。節亭琴驢等あり。十返舍の門には。大原市女。東寧舍一河。東墻舍一爪。五返舍半九。金鈴舍一室。愚舍一德。半返舍一來。九返舍一八。十字亭三九等あり。又式亭門人に。樂亭馬笑。古今亭三鳥。一亭三生。益亭三友。

福亭三笑、一亭三子。德亭三好。雪亭三冬。春亭三曉。匠亭三七。一亭三樂等あり。柳亭門下もに。柳下亭種員。柳水亭種清の徒あり。是等の人々が述作なる。種々雜體の草子は。實に汗牛充棟にして。小說の流行。蓋し當時より盛なるゝあらさるべし。然れども當時の小說は。民間のみに行はれて。士太夫以上は之を見るを快しとせざる風ありき。著者はた多くは蕩逸の遊冶郎。俗に謂はゆる粹客通人なる者故。學者文人は小說を鄙陋と罵る。淫猥と議して。常に之を擯斥せり。況んや己れ之を作らんとは。思ひだに寄らざりけん。されば小說は唯。估客老圃の顧を解くを以て目的とし。小說家は。戲作者の名に滿足しさりしなり。維新以降。一時衰頽の色見えて。新著の小說寥々たりしも。近來奎運大に開け。西洋の文學も渡りければ。彼國の小說を反譯し。或は翻案もして。新著漸く多きを加へ。再び今日の全盛を見るに至れり。其趣向の巧拙。文章の精疎の如き。古今の比較は茲に辨せず。唯近古の作者は。趣向文章の上のみならで。旁ら繪樣に意匠を凝らしつと見ゆ。今も畫工に一任して作者の好みなきが如し。さても昔は學者の擯斥しさりしもの。今は却て學者の任とし。凡そ文學に携はる者の。小說かゝぬはあき程なる。世の變遷こそ不測なれ。殊に小說は。文學美術の上乘なるものとかいふ說ありて。昔時に比しては。其品位極めて高上になりしなり。あはれ世の小說家。益意匠を錬り。文章繪畫にも注意したらんには。盛代の文學美術に光輝を增さん事疑ひなし。

小說史稿畢

（坪内逍遙君の手翰）

前略　扨御高著早速拜見可仕之處。何かと取紛れ。本日迄其儘に致し置。無申譯。只今始めより拜讀。思ひ付候事ども。御用には立まじけれど。別紙へ書綴り入御覽候。御參考の一端ともならば。如何ばかり嬉しく侍らん。僭越ながら。御組立といひ御文章といひ。雙つながら簡潔にして。おかも洩れたる所なく。敬服奉存候。只慾には作者列傳。今すこし詳密ならば。我々同好の喜び幾倍せん。御材料は山の如きを。何とて吝みたまふかと。身勝手ながら奉恨候。先は御返事のみ匆々頓首。

十五日　　坪内生

（別紙）

坪内逍遙君の手翰

小説の起源

西洋にても小説の起源は本文にいれさるが如し。只彼は重に韻語もて綴りさるに。和漢は散文にて物しさるの差のみ。希臘の名篇「イリヤド」幷に「オデセイ」の如きは。本文に所謂第三類に外ならねど。全く詩の形をなせるもの也。而して「イリヤド。オデセイ」は。歐洲最古の大稗史といふべし。其他中古時代に盛なりし。俠士の物語さては戀愛の物語の如きも。同じく韻語にて綴りし也。今の謂はゆる「ノベル」(小説)の行はれしは。近代に及びての事なり。英國に誠の散文小説の出來しは。紀元後千六百年代より早からず。小説の定義をむづかしく釋くは。全く後世の意見なり。本來は人の心を娛まするに外なら

ず。

公家時代には小説上流に行はれ云々

歐洲にても中古封建時代の(韻語にて綴れる)小説は。重に上流の玩びなりしにや。立者(たてもの)とせられさる人物は。押べて侯伯の高き身柄の人。さらでも文武に秀でさるものゝふ。才色を兼たる姫君なり。下賤の者を立者としたるは稀なり。何れの國にても。小説は奢侈の文學。餘裕ある社會の御伽草子なり。下流一般娛樂の料となりしも。遙に季の世の沙汰なり。

足利時代の謠曲も小説の一種と定む云々

西洋の小説も。既に前に云へる如く。韻語の小説(謠ふべきもの)より轉化せしなれば。謠ひ物より化成せりと云

ふを得べし。扨中古の物語には。自から二種あり。一は專ら武士の功績を語り。一は重に戀愛の物語なり。此二つの者後に一つになりて。今の小說の基を開きぬ。

戰國の時文學あるは只僧徒のみ云々

西洋にても。亂世にハ僧のみ文學を專有せしかど。小說を物せし例は稀なり。但し英佛の演劇の始めも。何れも僧侶の手になれり。さるは神の靈威。耶蘇の功德。尊者の偉績等を。最初演劇に仕組しによる。神業劇(ミレクル。プレイ)といふは是なり。人情世態を演劇に仕組たるは。餘程後なり。希臘時代(二千年以前)の演劇も。最初は神代記に外あらず。蓋し宗教も一般の人心を感ぜしむれば。何れの國にても早く材料に用ひしならむ。

淨瑠璃

前にいふ韻語小說は。取も直さず我國にいふ淨瑠璃か。樂器に合せて謠ひしもありと見ゆれば。十二段草子に似たり。又別に「バラッスト」と稱して。當時武人中よりてはやされしものあり。是はまゝ陣頭にて。樂人に諷はしめし例あり。我が平家物語と同趣にて。多くは勇ましき軍物語なり。

御伽草子

西洋にては。此類を「ウヘアリ。テールス」(仙話)といふ。重に仙女仙兒仙人等の。或は善童女を救ひしこと。或は善人を助けしことを語る。中には唯譯もなく無邪氣なるもあり。何時頃より行はれしものか知らず。兎に角に古くよ

りありて。今尚もてはやさるゝ「フヘアリ。テールス」に似て異なるも。「フヘーブル」(寓言)なり。「エソップ物語」の如きをいふ。是は奬識の意の明かなる點に於て。前の仙語と同じからず。我國の御伽草子は。むしろ「フヘーブル」(寓言)に近かるべきか。

草雙紙

西洋にては。古き小説に挿繪あるは殆と無し。挿畫を用ひしは近き世の事と覺ゆ。今も畫あるは稀なり。但し仙話は今一般に畫を挿入す。

三馬の滑稽本は世人がなす程の失策破綻云々

三馬は實に我國のアヂソン。スチール歟。英國にても。昔は笑を買ふゝめにのみ道戯しが。アヂソン。スチール。(共に戯文家)さてはフヒールヂング(小説家)出て以來。人情の爲に道戯さり。三馬は今の小説の標準をもていふも。一沁の小説家さるに近かるべし。

浮世草子

西鶴八文字舍等は。今いふ小々説(ノベレット)。又はスケッチ(端物)の作者なり。西洋にも是に似たる作者多し。近くは米のワシントン。アルビング實に此派のひとり也。

洒落本

かゝる類ひ必ず西洋にもありしならん。淺學にして知らず。但し猥褻の嫌ひなき限りは。所謂ポンチ中にいくらもあり。經丈金鵝の如きは。西洋にてはポンチ書きとす。小説家といはず。

讀本

英國にて。時代物の小説を盛にせしは。ヲルタル。スコットあり。馬琴と時代を同じうす。趣向の豐富文章の流麗。まゝ馬琴と似る所あり。唯馬琴は勸懲を緯とし娯樂を經とす。スコットは尚別に期する所あり。スコットの作は小説にして歴史。假作にして事實。史家もさゝへて活風俗史となす。我國にてもてはやす。リットンの作は。誠はスコットの摸倣のみ。

演劇脚本

西洋の演劇脚本は。早くよりシエークスピヤの作の。今尚傳はれるを見ても知るべし。我國の脚本と異なるは衣裳道具を記さず。思入こなし等を一々まとわらぬまあり。先つ淨瑠璃院本ならむ。

（嬰庭篁村君の手翰）

前略　御著述近頃の悦びにて。樂しく拜見仕候。元より淺學の小生。殊更歳暮にせまり。書き物に追はれ。おか〳〵考案の暇も無之。別段可申上儀も御座なく候。乍併折角御草稿御示しになり。何ぞ云ふともあらばとの御下問に對し。一言なきも却て失禮と。聊思ひ付候條々。可申上候。

浮世草子といふ名目御立にて。西鶴以下の著を列せられ候は。至極面白き御分方に候へ共。其起り御記しなきは飽かぬ心地仕候。愚案には。是は遊女野郎の評判（後世細見記といふも丶類）の類より。追々細密になり候て。西鶴物生れ出候かと

存候。既に箕山の両巴巵言などは。細見の類かと存じられ候。讀本は。御説の如き傳統より出候と。まさ繪入讀本と普通に唱候。京傳馬琴物は。千路行者の英雙紙。繁々夜話より胚胎致し候と。二筋あるかと存候。其語據は書きぶり。皆此二書によりて變化せしやに覺えられ候。酒落本(俗に蒐翁本)なども。風來の假名文選の類の酒落文を小形に作りしが。追々深川吉原の世界に移り候にてはなきか。是等一々書物を取出して。照し見たく候へ共。御存之通りの乱雑。サア探さうとなりて。あか〳〵知れ不申。夫ゆゑ考への年代など違ひて。合はぬ事も可有之候。小生曾て思ひ候には。上代の事は姑く置き。近世の小説といふものには。評判細見類より進化したる。風俗人情を實寫し。浮世の狀を細かに穿ちし物と。實錄傳記に似つかはしくして。人間の盛衰時世の治乱を説く物と。儒者佛者が人を導くために話しを設け手近く面白くせしものとの。三の筋立ありて。夫より小異を生じたるものか抔と存候。今御著述に委しく分られ。小説傳統表を添へられ候を見て。細密の御用心に感服仕候。實は小生も二三友人とはかり。小説家傳を輯め。また其作柄などを批評仕らんと。身に負はぬ野心を起し。三四年來材料取集め中に候ひしか。御著述により傳統の大概を知り。大助かりに御座候。いつれ參上仕り。御著述に御用ひの餘材。此方へ拜借願ふべく存居候。其折は又御助合願上度候。餘事拜面草々頓首。

十二月廿一日　　饗庭與三郎拜

著者曰。本書讀本の傳統を云ふ條は。甚だ杜撰なりき。今饗庭氏の手翰に。「千路行者の英雙紙繁々夜話より胚胎云々」とあるを見て。實にもと心付きたり。喜びと同時に。深く粗鹵なりしを耻づ。かゝる事。外にもあるべきを。倉卒の業なれば。と。看る人幸に之を諒せよ。英雙紙の作者は。通稱を都賀六藏といふ。名は庭鐘。字は公聲。大江山人また大江漁夫とも號せり。繁々夜話。莠草紙。狂詩選等の作者なりかしこに漏しされば。聊爰に追記す。

附錄 作者略傳

岡清兵衛

岡清兵衛名は重俊櫻井丹波少掾正信が。淨瑠理正本の作者あり。丹波掾の正本は。世に金平本と稱するもの是なり。此書の趣向は坂田金時が子を金平と云ひ。渡邊綱が子を武綱と名け。俱に强力にして猛獸惡魔を退治する由を書ける也。されば怪力亂神を好む者は。其文句を聞ては。握腕切齒して喜ぶ程に。三歳の童子も。金平の名を知りぬ。清兵衛は稟性詞才あり。强記にして尤も中古の戰記を好み。盛衰記太平記の類は殆と皆がら暗記せり。殊に儒釋の道は更なり。和歌の方にも一渉り通じければ。古事を引くに得意なりきとぞ。貞享四年の刊本なる。故鄕歸江戸吐卷六に此清兵衛が近頃病死し

たりと聞て。哀れにも惜しく思ひければ。

金平を作り岡清べう死して。惜しや思へば學もとけ綱。

どあれは。其頃は既になき人と見えたり。

近松門左衛門

名は信盛。通稱平馬。椙森氏。平安堂。巢林子。又不移山人と號す。長門萩の人なり。幼き時。肥前唐津の近松禪寺に遊學し。頗る內外典に涉り。夙に才名あり。長して京に上り。ある縉紳家に奉仕して。旁ら國典に通せり。致仕の後。實弟岡本一抱子の[illegible]に寄寓し。傳奇狂言座の都万太夫が需めにより。始めて一部いの戲曲を綴り。近松門左衛門の戲名を記しぬ。是れ此翁の戲曲を物せし始めなり。近松門左といふ號は。其身曾て近松寺にありし故舊を忘れじとの微意なりとかや。續きて宇治加賀椽。井上播摩椽。まゝ浪花なる竹本筑後椽等の爲にも。傳奇の書數百部を述作し。名聲一時に顯然たりき。淨璃理を五段續きに綴り初めしは世繼曾我とて。此翁の創意なり。翁の戲曲を述ぶるや。唐の大倭の故事を引き。釋氏の譬喩に據れるもあり。文章の流暢なるは。自ら一家の風をなせり。其中に國姓爺合戰。雪女五枚羽子板。曾我會稽山を三絕作とす。國姓爺合戰の院本。海內に流布せしのみならず。長崎の譯司同文二右衛門。第三齣樓門の條を清語に譯して。彼邦まて贈りたりき。翁が傳奇に關する意想。及び文才に富める物語は尙多く傳りたれども長きを厭ひて略せり。翁は享保九年辰十一月廿一日。大阪に歿す。行年七十二。

墳墓は卒するに先たち。大阪八丁目寺町妙法寺に建つ。法號

も又自ら命ぜし所なり。葬地は攝津の久々智。廣濟寺なりとか辭世の草と聞えしは。

代々甲冑の家に生れながら。武林を離れ。三槐九卿に仕へ。咫尺し奉りて寸爵なく。市井に漂て商買知らず。隱に似て隱にあらず。賢に似て賢ならず。物知りに似て何も知らず。世のまがひもの。唐の大和の教へある道々。神釋儒道和歌有職。弓馬郢曲歌舞滑稽の類まで。知らぬ事あげに。口にまかせ筆に走らせ。一生を囀り散らし。今はのきはに至り。いふべき眞の一大事は。一字半句もなき倒惑。至愚の甚しき。心に心の耻を蔽ひて。七十餘りの光陰。思へば覺束なき我世經畢ぬ。もし辭世はと問ふ人あらば。

うれ辭世さる程さても其後ま。

殘る櫻のはなしにはもど。

享保九年中冬上旬

入寂名　阿耨院穆矣日一具足居士

不レ竢二終焉期一豫自記。春秋七十二歳。

殘れとは思ふもれろか埋火の。

けぬまあだある朽木かきして。

近松が遺す所の硯。門人半二に傳ふ。其蓋に漆して事取二凡近一而義發二勸懲一と記す。こゝ笠翁傳奇の序に。昔人之作傳奇也。事取二凡近一云々とあるをとれり。平生の用意想ふべきなり。文政中浪花の梅園といへる人。近松翁が墓碑の斷滅を歎き。新に一碣を建てんとす。折柄太田南畝彼地に遊べる頃なりしかは。卽ち請ひて墓表を撰ましむ。其文に云く。

浪華梅園主人建

近松翁碣

平安堂近松翁以善戲文聞于海内後之作者學其體裁以爲師法蓋此方李笠翁也其墓併配在浪花谷町妙法寺今爲斷碑梅園主人新建一碣使予記焉按翁本姓杉森諱信盛字平馬長門萩人父諱某母某氏以慶安四年辛卯生翁享保九甲辰十一月廿一日歿年七十四伯出家爲相國寺長老仲善醫稱岡本一抱子叔爲翁季女錦江爲俳諧師擅其名翁幼遊唐津近松寺入京事一縉紳爲雜掌後辭仕居浪花變姓名稱近松門左衛門號平安堂巢林子爲宇治加賀椽作戲文云團扇曾我其文大行演戲百日改曰百日曾我實元祿十二年也又作國姓爺一曲演之三年至今膾炙人口翁於事情無所不盡宛然口氣感動人意其孝悌忠信禮義廉耻之風使人興起其功偉矣唯曾根崎一齣四夫四婦之諒失死俱斃名曰心中此風靡然害於其政可謂功罪相半矣然物夫子一見此文至其夫婦將死曰一歩霜消一歩霜五更三點唯餘一喟然歎曰彼妙處在阿堵中然則一切一罪在善聽之者於翁何病焉

文政四年辛未仲冬　江戸蜀山人撰

右の文中一歩霜消云々は曾根崎心中下の卷に。

此世のなごり身のなごり死に行く身を譬ふれば あだしが原の道の霜ひと足つゝに消えて行く夢のゆめこそ哀れなれかぞへ〳〵て曉の七ツの時が六となり殘る一つが今生の鐘の響きの聞きをさめ寂滅爲樂と響くなり。

とあるをいへる也一說に翁は越前の人にて始め剃髮して僧となり近松寺の長老に從ひて古澗と稱し積業して住職

とまでなれりしが故ありて還俗せりとも又幼き時遊學せしは唐津の近松寺にはあらで近江高觀音近松寺御坊なりともいへば姑く爰に附記す。

竹田出雲

名は清定千前軒と號す其祖は阿波の産なり父清一始めて江戸に來り出雲を生めり程なく清一は出雲を携へて上京し機關人形を創製し戲曲を演ぜる事となりしが萬治元年二月故ありて出雲樣と受領號を賜はり寛文二年大坂へ移りて操り座の元祖となり享保十一年五日近江樣と改む身まかりし後長子清英二代目近江樣と號して家を承け二子清定出雲の名を讓られき享保八年三月大塔宮曦鎧といふ傳奇を稿し近松門左をして删潤せしめき是れ出雲が院本述作の始めなり此外生涯の戲作數多が中に假名手本忠臣藏を傑作とする事人の知る所なり菅原傳授手習鑑義經千本櫻等これに次ぎて行はれぬ忠臣藏は寛延元年の作なるが是より先近松が基盤太平記並木宗輔が忠臣金短冊などいへるありて共に赤穗義士の事を傳奇に作爲せしなれど出雲の忠臣藏いでゝより寒村僻邑に迄行はれ前の院本は廢れにき出雲は寶曆六年十月廿一日を以て終る年六十六辭世の句は

影涼し水に彌勒の腹袋

其子を小出雲とて同じく傳奇を作るに巧なり新薄雪物語軍法富士見西行など其筆あり又並木千柳三好松洛などいふ傳奇作者も皆出雲の門より出でつといふ

西澤一鳳（風）

正本屋九右衛門と呼びて。大阪心齋橋南江四丁目に住む書肆なりき。戯作を好みて院本數曲を著はせり。其重なるは建仁寺供養。井筒屋源六戀の寒晒。賴政追善扇の芝。女蟬丸。昔米万石通。南北軍問答。身替弓張月。本朝擅特山。北條時賴記等なり。中にも北條時賴記は。近松が國姓爺の曲にも劣らず。豐竹座に於て。演戯二ヶ年の間打續きたりと云。享保十六年五月廿四日。病て歿せり。年六十七。辭世の句は。

散り行くや。風に常盤の木の葉雨。

墓は大阪下寺町大蓮寺にあり。法號常響貞寂禪。定門とかや。

紀海音は一鳳（風）が門人ありといふ。

並木宗助

宗助は種姓あられず。舍柳と號し。通稱松屋宗助と云ふ。享保の始めより浪花豐竹座の傳奇作者となり。院本數多を著はせり。中にも忠臣金短册那須與一西海硯。苅萱桑門筑紫轢。和田合戰女舞鶴。釜淵雙汲巴の如き。今に至て世に行はる。寛保二年。江戸。肥前椽座に聘せられ。石橋山鎧襲等の戯曲を作れり。居る事數年。故郷に歸り。一谷嫩軍記を書きさして病歿せり。されは此曲は皆から宗助の作にはあらねと。所謂壇特山より陣屋の段に至る。敦盛身替りの條は。全く宗助の意匠なりとぞ。時に寛延二年九月七日。享年五十七といふ。

紀海音

海音姓は榎並。俗稱喜右衛門。後に善八と改む。狂歌に名高き。鯛屋貞柳の弟にて。貞峨と號す。始め黄檗の宗旨を信じ。一た

び和州柿本寺に入り僧となりしが。歸俗して大阪に住し。醫を以て業とせり。又圓珠庵契沖に從ひて和學を修め。鳥觀齋契周といへり。戲作を好み。院本には紀海音と著名せり。戲曲の世に行はれしは。鎌倉三代記。平安城細石。心中二腹帶。油屋れ染袂の白絞。八百屋れ七歌祭文。此餘猶多かるべし。元文元年の夏法橋に叙せられ。寛保二年十月四日歿す。歳八十といふ。大阪八丁目寺町寶樹寺に葬る。法名は清潮院海音日法とや。

近松半二

半二は浪花の儒家。穗積以貫の子なり。若き時頗る放蕩なりしが。天稟の詞才ありて。近松門左衛門に從ひ。寛延四年始めて。役行者大峯櫻を作り遂に竹本座の戲曲作者となり。述作する所實に數十百種中にも蘭奢待新田系圖。姻袖鏡。本朝廿四孝阿波鳴戸。忠臣講釋。近江源氏先陣館。妹背山婦女庭訓。關取千兩幟。伊賀越道中雙六。新板歌祭文。三日太平記等の如きも。今に至るまで院本演戲ともに行はる。劇神仙壽阿彌(長島曇奇といふ幕府の御連歌師なり。戲曲を好みて長唱淨瑠璃の作多し言へるとあり。云く。近松は此道の聖なり。出雲は。亞聖なり。半二は大賢と稱すべしと。半二天明三年の二月山科に慢遊中に身まかりつと云ふ。享年五十九遺稿を獨判斷(ひとりさばか)して。同七年に刊行せり。

福内鬼外

鬼外本名は國倫。平賀氏。字は士彝。通稱源内。鳩溪と號す。通稱を以て行はる。風來山人。天竺老人。紙鳶堂等皆其戲號なり。又院本の作名を福内鬼外と著せり。讃州志度浦の人。後江戸に

住めり。源内幼にして才辨あり。夙に立身揚名の志を懷きて鄉關を出で。四方に歷遊して和漢の學者を訪ひ。曾て長崎に在て。譯官彭城東吉に就て象胥を學び。親しく蘭人にも交りて。粗蠻字をも知り得たり。又江戸に來りては。官醫田村元雄に從ひて。本草物產の學を究め。頗る出藍の譽れあり。物類品隲の著は此學の結果なるべし。唯これのみならず。多才多能の質にて。甘蔗の培養。礦山の開拓。エレキテルの製造。火浣布の發明より。はかなき業の工夫まで。往々人を驚かしゝ事ありき。元來俠儻豪邁にして。細瑾を顧みず。本意い貨殖經濟の術を以て。世に用ひられん事を望みしも。不幸にして生涯知己を得ず。不平積鬱の餘。晩年に至り。彌々自恣放縱にして。一世を傲弄し。戲編の草子に憤りを泄すに至れり。畢竟詼諧を述べ傳奇を作るは。源内が末技なり。此餘緒を以て此人を議す可らず。明和七年の春。吉田冠子の勸めによりて。始めて神靈矢口渡と云ふ院本を著せる由。其書の跋に見えたり。されど其實。新田の神の祠官某は。源内が相識なりしがある日某。源内に語りけるは。本祠は畏こくも。南朝の忠臣新田義興朝臣の神靈を。齋き祀る所なるを。世に知る人稀にして。近來堂宇傾頽し。誰詣する者なきを。何卒して神威の炳焉なるを知らしめんと願ふ也。其許にも。いかで我志を助け給ひてよといへば。源内うは安き事なり。我に一策あり待ち給へとて別れしが。不日にして矢口渡の傳奇を作り。操曲に演ぜしかば。俳優藝妓等を始め。大方の人さへ競ひて彼所に參詣し。神垣のうち群集して。荒れにし社殿も忽ち修復したりとい

ふ。此後猶數曲を著しゝが。弓勢智勇湊荒御魂新田神德。嫩松葉相生源氏。忠臣いろは實記。前太平記古跡鑑。實生源氏金王樓。源氏大草子等世に行はれき。此他滑稽の草子にも。假名文撰。根なし艸。志道軒の傳。菩提樹の辨。仙術金のなる木。蛇腹青大通。菊の園等あり。安永八年の冬。源内門生と假初の口鬪より事興り。遂に之を殺害して獄に下る。一說に某侯別業を經營の時看督の匠工。源内に就て謀る所あり。源内爲に計畫豫算を錄して之を示し。相歡びて燕飲し。夜も更されぱとて。源内が家に一宿せり。翌朝源内豫算計畫の手記を索むるに非されば。必定匠工の偷みし事と疑ひ。之を責むれとも抗辨して屈せず。源内怒て之を斬り。遂に死に至らしめきと云ふ。但し是前より。時々慢言放論。少しく喪心の態ありき。明年元旦獄中の口吟に。

去年つぎし首で又見る初日の出。

二月の頃病て獄中の鬼となれり。享年五十一。去年の初冬人に示して自讃せし俳句に。

乾坤の手をちゞめたる氷かな。

といへり。後に思へぱ辭世の讖となりにけり。源内生涯獨居にして妻子なければ。從弟某遺髮を得て淺草橋場總泉寺に埋め。私に法號を智鑑靈雄と贈れり。翁の畸談はこれに盡きず。委しくは余が鳩溪叢談に記せり。今唯一端を抄錄するのみ。

近松德三

幼名勝助といひ。德三を通稱とし。後に德叟と改む。俳號雅亮。

浪花坂町の娼樓大桝屋勝右衛門が子なり。幼き時より戯曲を好み。近松半二の門に入て院本數十部を著はせり。中にも箱根靈驗讐仇討。花上野譽碑。敵討優曇華龜山など尤も佳作と聞ゆ。後年演劇の作者となりて。司馬德叟また芝屋德叟とも稱せしが。程なく近松の舊稱に復せり。文化の始め。熊澤蕃山か露の干ぬ間といへる今樣歌より案じ付きて。朝顏の演劇を綴りしを。故ありて未だ奏演せざりしに。文化七年八月廿六日。可惜病で歿せり。享年五十七。さるは此脚色も畵餅となりしを。同門の後進近松柳。頗る遺憾の事に思ひて翌年之を讀本躰に補綴し。德叟遺稿朝顏日記と題し板行せり。其後更に演劇に改作し。又嘉永三年生寫朝顏話といふ院本も出來しが。實は德叟が意匠の趣向を聊か校補したる也とぞ。

井原西鶴

西鶴ハ俳諧の師にて。大坂槍屋町に住す。始め西山宗因の門に遊びて。松壽軒と號し。又難波俳林と稱す。ある日住吉の社頭に於て。獨吟二萬三千句を吐きしより。二萬堂また二萬翁とも別號せり。此翁俳諧を以て本業とせしと聞ゆれども。世俗の口吟とする秀句甚だ少なし。今秀逸なりとて人口に殘るは。

我戀のまつ島もさぞ初かすみ。

長もちに春かくれ行く衣がへ。

鯛は花は見ぬ里も有今日の月。

大晦日定めなき世の定めなり。

是等二三に過ぎず。却て戯作の草子に名高し。天和の頃。竹本

筑後少椽の委囑によりてよみ。又は凱陣八島おといふ。淨瑠璃本を綴りし事もありしが。元來博學多識といふにはあらねど。能く世態人情にわたりければ。目前に見る所の情實を述べて。根なし事の草子あまさを作れり。其書は男色大鑑。好色一代男。一代女。二代男。三代男。世間胸算用。一目玉梓。日本永代藏。櫻陰秘事。風流盛衰記。西鶴織留。名殘友。彼岸櫻等なり。之を世に西鶴物といふ。いつれも滑稽諷謔にして能く。估客老圃の頤を解けり。後自笑其碩の徒皆此翁が筆意に倣へり。實に戲作者の鼻祖といふべし。元祿六酉年八月十日歿す。享年五十二才。墓標は大阪八丁目寺町醫願寺にあり。俳諧の弟子下山鶴水北條團水の建つる所なり。西鶴が辭世の句として。彼岸櫻といふ遺稿の端に載せたるは。

人間五十年の究りうれさへ
我にた餘りあるにまして哉。
浮世の月見すてしにけりすゑ二年。

とあり。

難波俳林松壽軒西鶴。

畠山箕山

箕山も呑舟軒と號す俗稱常次。西鶴と同時の俳師なり。其著す所。色道大鑑十八卷も。六十餘州の花街を歴遊し。年を積む事三十餘年にして脫稿せりといふ。はかなき著述なれども熱心のほど想ふべし。晩年轍を改めて。世を益する著書の發兌もありきと聞こゆ。

青木鷺水

鷺水は歌仙堂と號す。又白梅園三省軒の別號あり。京師の人にして野々口立圃の門に入り。俳諧を能くす。然のみならず詞才衆にすぐれて。世態俗事を寫し。其筋の著書多しとぞ。享保十八年三月廿六日歿す。

安藤自笑

自笑は本姓藤原氏。通稱八文字舍八左衛門とて。京師麩屋町通誓願寺下る町に住める。書肆の主人なるが。文才ありて戯作の冊子あまたを著はせり。野傾色孖。分里艶行脚。都鳥妻戀笛。裾野櫻。風流御伽曾我。仝東海硯。仝東鑑。仝軍配團扇。浮世親父形來。傾城玉子酒等。此猶多かり。傾城禁短氣。仝曲三味線色三味線などは。江島其碩と合作なり。抑自笑の戯文は大かた其碩が助筆なるを。自笑一人のみ著名して發兌せしに。常に世評よく。名譽と利德と。共に自笑一人に歸するにぞ。後には其碩之を羨み。自笑其碩合作の趣きに著名したりといふ。又一說に。自笑は唯射利に心とき估人にして。固より文藻に疎く。著述の才なし。始めは其碩をして代作せしめ。其碩と絶交の後は。多田南嶺して。己れに代りて綴らしめつといふ。故に自笑は金力を以て。諸家の合力を買ひ。遂に文場に名高き人となりしとぞ。延享二丑年十一月十一日歿す。歳八十餘。京都二條寺町本覺寺に葬れり。

江島其碩

其碩は俗稱市郎右衛門といふ。其祖はもと京極通誓願寺門前に小舗を開き。餅を製して鬻ぎたりき。世人之を大佛餅ともてはやされて。忽ち巨萬の財主となり。代々江島屋太郎右

衛門と名告りしが。其碩の世に至り。いつしか其業をやめて。四條御旅町に移れり。其碩若かりし時頗る放蕩にして。遊里に巨多の財を散し。奢靡を事として産を失ひけるが。性來詞才に富めるをもて能く下界の情態を述べ。多くの戯作を物したりき。中ゝも傾城禁短氣などは。全く己れの作なるを。自笑に與へて刊本とせり。實ゝ烟花の一絶筆とや。自笑が著述は。大かゝ此翁が加筆なりし由は前にも云へり。翁晩年名利を求むるに急にして。遂に自笑と絶交し。己れのみ著名して發梓せし書も多かりしが。趣向文章とも前著(自笑の名にして發梓せし書)に劣るとにはあらねど。何如せん年來聞えし自笑が雷名に壓せられ。其碩の名は稱する者稀なりき。其碩が歿年傳はらず。思ふに享年七十にして。元文元辰年六月に身まかりし歟。うは翁の遺稿其碩置土産ゝ。洛東其跡が序して。「七十年はたつの年のみな月に此世をさりぬ云々」と書けり。此書の發行は元文三午年なれば。その二とせ前。元文元年に歿せしなるべし。

南嶺子

南嶺は多田氏。初名政仲。又滿泰。義俊とも改めつ。通稱進藏。又兵部といふ。攝津の人にして京師に遊び。壺井鶴翁の門に入りて。國學を究め。尤も典故に精し。又俳諧を半時庵談々に學びて。男鈴と號し。後南嶺に改む。桂秋齋は其別號なり。南嶺博識强記。能く雅俗の事に渉り。見聞一たび過ぐれば終身忘れずといふ。享保の初め。洛に在て多田將監と稱し。專ら甲州流の兵法を究めゝりしが。最も長ずる所は典故の學にして。撰

者の後世を裨益するも又極めて多かりき。然れども。惜いかな。操識なく。品行放縱浮靡ふして。窮する時も人を謀るの癖ありき。されば後世國學の先師。兵鈐の達士と仰く者なく。貶して西鶴自笑の徒となすも宜なりや。さても自笑其碩の間に隙を生じてより。さしも流行の。浮世草子暫く絶えてはかゞしき新作もなかりし所に。南嶺自笑が需めにより代りて作り初めけるが。趣向筆勢をさ〳〵其碩に劣る事なく。中に も鎌倉袖日記は。普ねく世人の喝采を博し。遠く其碩の上に立てり。南嶺草子を綴るに。趣向肚裏に湧けば。直に筆をとりて文を成す。曾て稿を代へし事なしとう。而して趣向盡くる時は。朋友知己も固より我身の上の來歴まで。小説に取り做せり。甚しきは。朋友の名を地名に替へ。又は其儘用ひたるもあり。武遊二ッ巴といふには。現に我身の上を書きし也とか。南嶺い寛延三午年九月十二日歿す。享年五十三。嶺が生涯の奇談は爰に盡きざれども。多くは戯作に拘らぬ事なれば漏しつ。著述の書目も又然り。

建部綾足

建部綾足は凉岱と號す。東奥の士にて。若き時身の程の高き人に思はれ。其事露はれて亡命し。平安東福寺に入て出家し。漸く登りて喝首座といへり。性物に敏く。才藝人の跡を蹈まず。或時人の俳諧するを聞きて。己れもして試んとて一句を吐きけるを初として。三月斗りに其導きし人の句を。兎かく批評し作り替へなどせしも。其人閉口する程になれり。後加賀に遊びて。俳諧に名ある希因を師とし。伊勢に行きては。乙

由が流を汲み。終に還俗して江戸に來り。淺草雷神門前に住し。風神の袋負へる像を喜びて。自ら凉岱と號し。俳諧を以て業とせり。其頃國學の大家加茂眞淵翁。專ら萬葉の古風を興すにより。我妻を門人とし。己れ竊に其說を取りて學び。終に俳諧を止めて片哥といふ事を唱ふ。是は古事記に出たる日本武尊の御作。

にひばり筑葉を過ぎて幾夜かねつる。

と遊ばしたるに基き。之を旋頭歌の片歌といひ。五七五の常の樣なるをも片歌といへり。かくて伊勢の能保野なる尊の薨じ給へる跡に碑表を建て。又華山院右府の公に請ひて。片歌道守といふ四字を書きて賜はりしを。扁額として壁間に掲げ。心に飽かぬ事ある時は。之を仰ぎて憂を遣るといへり。

又國風の文章は最も古雅にして。筆勢の鼓舞比類なし。さるは古き物語ぶりの書あまた綴れり。繪事は始め何の流を學ひしにや。一とせ長崎に至りて。熊斐に從へりとも聞こゆ。後京へかへり。もてに妻を伴ひ東のかさに遊びしが。上野熊谷の驛に病みて。門人の家に身まかれり。時に安永三年三月十八日なり。俳諧片歌の書。畫帖など。著述あまた印行せしうち。小說にも西山物語。吉野物語等ありき。

上田秋成

秋成は餘齋と號し。又無腸とも稱せり。花洛の人にして娼家に生る。性來奇癖ありて。唱ふる說も爲す事も。常に人には異れり。自からいふ。世の人は縱ま行けども。己れは心から橫に向くとて。別號を無腸とぞ付たる。これ蟹を橫行介士とも。無

腸公子ともいへは也けり。和歌及び茶道に至り深くして。伊勢の本居宣長翁。京の小澤蘆菴にも交り厚かりき。妙法院の宮へも折ふし參る事ありしがある時。手つくねの茶器を獻りしに。宮御親ら筆を染め給ひて。蟹の畫を遊ばし。これに讃歌せよとて下されしを。秋成甚く喜ひ。やがて麗はしく表裝して。餘白に歌かくべかりしを。さては恐こしとや思ひけん。裝ひ立てし表具の絹に。

津の國の難波につけてうとまるゝ。芦間の蟹の横はへる身は」と書きつけたり。平生の豪放なるに似ず。謹み深しや。文章はた習はずして能く達せり。雨月物語の如き若かりし時の筆すさみなり。戯作の草子には。諸藝聞耳世間猿。まさくせ物語などあり。これも伊勢物語に擬して。をかしき事をかけるものなり。國學の著書もあまたあれど。爰に載せず。翁は文化六巳年十一月廿六日。享年七十八にて歿せり。からは洛東南禪寺中西福寺に葬りぬ。

？、因に云。秋成は。歌討崇禪寺馬場といふ。院本に名高き。生田源八郎の遺子なり。母は花屋某といふ娼家の女なれども。かゝる人の胤なれは。種姓をも深く隱して。唯由緣ある武士の胤なりと披露しけるが。秋成生長するに從ひ。其業を賤しみ。家をも他へ移し。遂に茶香歌俳の諸道に達して。名をなすに至れりとぞ。委しき顚末は。西澤一鳳の言狂作書に見ゆたれと。事長けれい略す。

戀川春町

名は格。源姓。俗稱倉橋壽平といふ。狂歌を好みて酒上不埒と

戯名し。又壽山人と號す。駿州小島侯の家臣にして。小石川春日町に住めり。戯作の草子に。戀川春町と著名するは。居宅の地名によれるなり。安永四年。金銀先生榮花夢といふ草子を著し。翌年又高慢齋行脚日記を著して。名聲一時に籍甚たり。此餘花鳥かくれん坊。鼻峯高慢男。三幅對紫曾我。三升增鱗の始め。夷大黑若氣誤等。數ふるに勝へず。寶曆以來草子の體是より一變せりといふ。寛政元年七月七日。病に罹りて家に歿す。享年四十六。四谷新宿裏通淨覺寺に葬る。法號寂靜院廓譽湛水といふ。墓標の左に辭世の句を刻せり。曰く。

生涯苦樂四十六年。　即今脫却浩然歸天

明誠堂喜三二

喜三二は平澤氏。俗稱平格。喜三二は戯號なり。又龜山人と號す。狂歌を好みて手柄岡持と名告り。俳諧に月成。狂詩に韓長齡とも。天壽とも云ふ。狂名あり。秋田藩主佐竹侯の留守居役にして。下谷三線堀の邸内に住めり。著述の草子極めて多し。中に案内手本通人藏。文武二道万石通。鐘入七人化粧。古杤木。運開扇子花など世に聞えぬ。古杤木は靜觀坊の下手談。義風來の根なし艸の文體にして運開は草雙紙なり。老年に及ひ仕を辭して剃髪し。平荷と號せり。文化十年五月廿日歿す。歳七十九。深川淨心寺に葬る。

市場通笑

名は寧一。字は子彦。市場氏橘雫は俳號なり。俗稱小平二と云ふ。通油町に住し。生涯無妻にして。市中の仙人より。好みて稗史を戯作し。安永八年。始めて酒の癖正直咄などいふを發兌し。

爾來寛政の始迄に。あまたを著はせり。大通人穴さがし。御物好茶臼藝。芝居好目くら仙人。目あき仙人等皆其中なり。通笑述作の草子は。多くは教諭を旨とするを以て。世人教訓の通笑と呼べりとぞ。文化九年八月廿七日享年七十四にして歿す。法號覺法全心。淺草祝言寺に葬る。

唐來三和

三和は加藤氏。伊豆亭と號す。元武家に生れしが。放逸にして家を棄て。書肆蔦屋重三郎に寄り。それより本所松井町なる。妓院の夫ともなりしが。うこをも出でゝ後甚だ落魄したりける頃。

縄の帶身にはつゞれのあまつして。
かねが敵にめぐりあはゞや。

また辭世の狂歌と聞えしは。

かりの世の地水火風をもどすなり。

これで五倫のさし引きもなし。

歿年詳らず。草子の著述には。善惡邪正大勘定。忠臣一心藏。三教色。和唐珍聞。などありとや。

芝全交

通稱山本藤十郎といひて。西ノ久保神谷町に住す。大藏流の狂言師にて。旁ら戯作の業を好み。合羽大佛緣起。適一聲女暫。南無大通佛開帳。御手料理御知而已大悲千錄本等を著せり。寛政五年六月十八日身まかりきといふ。

森羅亭萬象

名は中良。中原氏。字は虞臣。桂林と號す。初は森島甫齋といふ。

官醫桂川甫周法眼の舍弟なり。平賀源内の門に入て。森羅萬象の號を讓らる。(源内初め萬象と戯號せり)又二代目風來山人。天竺老人とも號し院本の作名を源平藤橘といひ狂名を竹枝爲輕といへり。蘭學の業餘。稗史を戯作するに。誠に巧手にして師風あり。万象亭戯作濫觴。田舍芝居。夫從以來記など世に聞ゆ。文化五年十二月四日歿す。年五十五。二本榎上行寺に葬る。

四方山人

名は覃。字は子耜。南畝と號し。又蜀山人と號す。杏花園。石楠齋。遠櫻山人等の別號あり。通稱太田直次郎。後七左衛門と改む。幕府の吏なり。翁和漢の學に通じ。古今雅俗讀まざる書なく。知らざる事なし。又天明風の狂歌を唱へて。海内を風靡し。四方赤良と狂名せり。謂はゆる寢惚先生と云ふ者是なり。旁ら草子の戯作を好みて。著述あまたあり。文政六年四月六日歿す。歳七十五。白山本念寺に葬る。法名杏花園心逸日休といふ。

辭世の句は。

時鳥なきつるかた身初鰹魚

はると夏との入相のかね。

翁の事蹟には。逸興の物語あまたあり。年譜行狀ともに。別記あれは省けり。

朱樂菅江

名は景貫。字は道甫。淮南道と號す。通稱山崎鄕之助とて。幕府の吏なり。粗和漢の學に渉り。最も和歌を好む。後四方山人等の流に入り。狂歌を以て名聲籍甚たり。戯作の草子には。大抵